

GRL Studies Vol.1

2018

GENDER
RESEARCH
LIBRARY

ご挨拶

名古屋大学 ジェンダー・リサーチ・ライブラリへの感謝と期待

高橋雅英（名古屋大学理事・副総長）

2017 年の夏に、道路沿いの木立の中に落ち着いた佇まいの名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（以下、GRL）が完成しました。以来、名古屋大学の学生、教員、職員のみならず、市民の皆様にも開放された親しみやすいライブラリとして運営されていることを大変うれしく思っています。名古屋大学にはフェミニズムやジェンダー研究に関わる研究者や関心の高い学生が各部局で活躍しているにもかかわらず、部局を超えた交流は活発ではないようでした。この度、公益財団法人東海ジェンダー研究所のご厚意を得て GRL が創設されたことを契機に、名古屋大学におけるジェンダー研究に携わる研究者の交流が進み、新しい研究が展開されていくことを大いに期待しています。すでに 2 階に設置されたレクチャールームではさまざまなセミナー、講演会、研究会などが企画されてきています。特に、2018 年度は名古屋大学の『LGBT 等に関する名古屋大学の基本理念と対応ガイドライン』が作成されたことと連動して、LGBT に関連する 4 回の連続セミナーが開催され、活発な議論が行われました。まさに GRL に相応しい取り組みだったと感じています。また、水田珠枝氏より寄贈された蔵書（「水田珠枝文庫」）を含む 20,000 冊に及ぶ図書、歴史資料はジェンダー研究にとって大変貴重なものであることは言うまでもありません。大学としてもこれらの資料の維持・管理とライブラリの活動をしっかりと支援していく所存です。多彩な取り組みを通して、国内外のジェンダー研究者の集うネットワーク形成が進み、他に類を見ない「知の拠点」の創成につながることを心より期待しています。

目 次

ご挨拶	(名古屋大学理事・副総長 高橋雅英) ……………	1
ジェンダー研究の新たな拠点創設に寄せて	(名古屋大学参与 國枝秀世) ……………	4
GRL に期待すること (公益財団法人東海ジェンダー研究所代表理事 西山恵美)	……………	10

特集1 女性史の過去と未来

GRL開館記念講演会(日本語訳付)	……………	14
ナンシー・F・コット教授連続セミナー	……………	37

特集2 ジェンダー研究機関の過去・現在・未来

GRL開館一周年記念シンポジウム報告要旨	……………	42
----------------------	-------	----

活動報告

連続セミナー「LGBT とセクシュアリティからジェンダーを考える」	……………	48
水田珠枝氏フェミニズム基礎理論講座	……………	50
「2018年度 ジェンダー研究集会開催助成金」受託報告	……………	52
広報	……………	56
研究員エッセイ	……………	57
GRL蔵書紹介	……………	60

関連資料

所蔵資料	……………	64
図書室の統計	……………	66
GRLレクチャールーム・小会議室利用記録	……………	68
GRL関連記事	……………	71
執筆依頼記事	……………	72

付録

規程および内規等	……………	74
2019年度 ジェンダー研究集会開催助成金募集要項	……………	89
GRL運営体制	……………	90
編集後記	……………	91

ジェンダー研究の新たな拠点創設に寄せて

國枝秀世（名古屋大学参与）

ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（以下、GRL）が創設されて 1 年が経ち、年報として『GRL Studies』の創刊号が発刊されることになりました。東海ジェンダー研究所の皆様と共に名古屋大学側の責任者として GRL の創設に関わった者として、ジェンダー研究者でもない私が、僭越ではありますが巻頭言を書くことになりました。年報にはその年の活動報告と共にジェンダー研究の成果である論文を掲載することを考えていますが、初年度にはその審査体制がまだ検討中であるため、論文掲載は次号以降に延ばすことにしました。その創刊号の巻頭には、GRL 創設の趣旨、経緯などをまとめ、合わせて創設に関わった者から GRL への期待を書かせて頂くことにしました。

1. GRL 設立趣旨

国内には多くの「女性」を冠した大学、研究機関がある中で、ジェンダー研究を掲げた独立のライブラリはなく、2017 年 11 月、名古屋大学に初めてジェンダー・リサーチ・ライブラリが公益財団法人東海ジェンダー研究所のご協力で設置されることになりました。名古屋大学との寄付に関する合意書には以下の 3 点が設立の目的として書かれています。

- ① ジェンダー問題についての〈知〉を長く保存し、ジェンダー研究者等に提供するためのライブラリとアーカイブを構築する。
- ② ジェンダーに関する制度や実践を研究し、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献する。
- ③ 国内外のジェンダー問題に関する研究、普及及びネットワークの拠点を形成する。

ライブラリの基本的な機能は〈知〉の保存であり、ジェンダー研究の歴史を蓄えて研究者に提供することが GRL の最初の目的です。GRL 開館記念イベントにお招きしたコット先生¹はその講演の中で、「歴史が社会を支えるために不可欠であるように、女性史は

¹ Prof. Nancy F. Cott, Jonathan Trumbull Professor of Harvard University.

すべての女性学の基礎となりうる」と語られ、歴史を蓄えることがGRLの重要な目的の一つだと指摘されました。合わせて過去だけではなく、現代のこの瞬間の記録を残すこともGRLの使命であるとも述べられています。今回GRL設立にあたり、日本のジェンダー研究の先達である水田珠枝先生がその60年を越える研学生活を通じて蓄えられた蔵書が寄贈され、GRL創設時の中核所蔵図書となりました。中には1800年代の希少本もあり「水田珠枝文庫」に展示しております。水田先生の社会科学的な観点からのこの蔵書はGRLの一つの大きな特徴になっています。前出のコット先生は館長を務められたシュレジンガー図書館を例にあげ、GRLも他の図書館にはない特徴を目指すように助言を頂きました。

図書はそこにあるだけでは意味がなく、これが読まれること、これを用いてジェンダー研究を進めることが重要であり、その研究の場となることがGRLの二つ目の目的となります。学内外のジェンダー研究者がGRLの特色ある蔵書を求めてGRLに来館し、これを用いて成果を創出することが期待されます。これに留まらず、積極的に国内外の研究者を招聘し、講演会やセミナー、ワークショップを開催することでジェンダー研究を推進することが求められています。図書の拡充やこうしたジェンダー研究推進のため、GRLでは研究員を雇用しています。初代の研究員は既にアカデミアの職を得て転出しますが、引き続きGRLでは研究員を雇用し、同様の活躍を期待しています。これにより、「性別にとらわれることなく生きる事ができる社会の実現」に向けた新たなパラダイムを創出するようなジェンダー研究がGRLから発信されることを目指して行くことになります。

日本のジェンダー研究者の多くに見られる様に、これまで名古屋大学では個々の部局にあってその専門とする研究に関連してジェンダーを研究する教員が学内に散在している状況でした。GRLの創設は、これらのジェンダー研究者がGRLを拠点として交流し新たな知のネットワークを構築すると言う、大学にとってジェンダー研究促進の好機となりました。そしてGRLが創設以来、広く国内的に知られる様になり研究者の交流や共同研究のネットワークの拠点となりつつあることは嬉しい限りです。今後も前出のGRLの研究員には国内外のジェンダー関連研究機関を訪れ連携を広げて貰うことが望まれます。GRLにおけるジェンダー研究の成果や蔵書については広く学内外に周知し、また講演会やセミナーにより発信することで、一般市民や学生に対して普及・教育を目指しています。これがGRLの三つ目の目的となります。

こうした目的のGRLを設立するベースとなったのは東海ジェンダー研究所における20年におよぶジェンダー研究と、遡って水田珠枝先生の研究と蔵書にありました。そのためGRLでジェンダー研究を進めるにあたっては大学側と東海ジェンダー研究所の

研究者が手を携え、また雇用した研究員と一緒にその展開と運営を担っています。具体的にはGRLの実質的な運営を司る「運営小委員会」と個別課題を議論する「専門委員会」を、大学、GRL、東海ジェンダー研究所の関係者で構成しています。このおかげでGRLの運営に学外からの視点が加わることにもなりました。学内的には全学の委員会として担当理事を委員長とするGRL 運営委員会を持ち、人事、予算・決算、事業計画、活動報告を行うことになっています。これは全学にGRLの存在と活動を広く周知するための仕組みと考えています。

2. GRL 設立の経緯

GRL 設立について最初に東海ジェンダー研究所から大学にご提案があったのは 2013 年 4 月のことでした。東海ジェンダー研究所西山恵美代表他のみなさんと濱口道成総長とお会い頂きました（國枝も同席）。その後、紆余曲折を経て、2014 年 11 月 14 日「ジェンダー図書館の設置」についての第一回意見交換会から設立に向けて学内で具体的な動きが始まりました。当時、名古屋大学におけるジェンダー研究は一部にジェンダーを題名とする講義・セミナーはあるものの、それぞれの専門の傍らジェンダーを研究する教員が分散しており、その規模も不明でした。関連する組織としては「性別による偏りのない社会システムの構築をめざす」男女共同参画室（現 男女共同参画センター）があり、濱口道成総長、藤井良一理事を先頭に名古屋大学における男女共同参画とそのための事業、環境整備を積極的に推進していました。

一方、東海ジェンダー研究所は「ジェンダー問題に関する研究、若手研究者の育成、男女平等意識の啓発と普及を行うことを通して、性別にとらわれることなく生きることができる男女共同参画社会実現に寄与することを目的」に 20 年近くのジェンダー研究の歴史を刻んで来られました。その東海ジェンダー研究所では、所蔵する図書と合わせ水田珠枝先生の蔵書をどこかに置き、ジェンダー研究に役立てることを模索して来られました。具体的な図書館建設、運営のプランを検討され、これを水田洋・珠枝先生ご夫妻ゆかりの名古屋大学へご提案頂きました。

提案されたジェンダー図書館は、国内外のジェンダー研究の拠点として、また学内に散在するジェンダー研究者の連携の場所として、更には学生、一般へのジェンダー研究の普及・発信の場所として、名古屋大学にとって願ってもない提案だと考えました。その後は國枝（当時 理事）が名古屋大学側の責任者となり東海ジェンダー研究所と一緒に設立の準備を進めました。

3. 設立への準備

濱口道成総長、松尾清一総長からの指示もあり、以下の様々な事柄について学内組織・運用のルールに照らし合わせ、多くの皆様の協力を得て設立への準備を進めることになりました。2014年11月以来5回の意見交換会を経て、2015年8月7日の覚書調印に至りました。その後は2015年11月6日の第一回設立準備委員会のあと GRL 発足直前の2017年9月まで15回の設立準備委員会で設置に向けた準備を進めました。

(1) 東海ジェンダー研究所からの寄付の概要 (2015年8月覚書)

- ① 図書：図書の寄贈に関しては別に定める。
- ② 運営費：GRL の運営およびジェンダー研究推進のための20年間の経費を援助するため3.5億円を限度として寄附するものとする。
- ③ 運営方法：名古屋大学ジェンダー研究者、男女共同参画室員、附属図書館職員、東海ジェンダー研究所構成員で組織する運営委員会（仮称）により運営する。

(2) 建物および建設用地

- ① 建物は建築の上、物納
- ② 建物概要：2階建。約840m²
図書スペース（最大4万冊収容）、閲覧・展示室、研究スペース、レクチャールーム、小会議室、東海ジェンダー研究所スペース、男女共同参画室スペース、カフェスペース等



GRLの外観

- ③ 建設場所：大学敷地内の法経共用館東側
伐採樹木15本については伐採本数と同数を大学敷地内で植樹
- ④ 設計：(株)環境デザイン機構。
施工：(株)竹中工務店。着工2016年12月。竣工2017年8月30日

(3) 蔵書 (2019年3月31日現在)

- ① 寄贈図書・雑誌・アーカイブ：水田珠枝蔵書7,668冊。東海ジェンダー研究所蔵書13,405冊。雑誌161タイトル。アーカイブ7タイトル。
- ② 学内登録：大学附属図書館の方式で登録（電子的に全国からアクセス可能）

(4) 組織と名称

- ① 大学附属図書館の組織的取り扱いで GRL は部局図書室と位置付けられ、組織上は男女共同参画室図書室として扱われる。
- ② 名称：正式名称を名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（略称 GRL）とする。
- ③ 運営組織：GRL の実質的運営組織として GRL 運営小委員会を組織。その構成員は、学内 6 名、GRL 2 名、東海ジェンダー研究所 4 名とする。実務を担当する各種委員会を設置する（広報委員会、図書選定委員会、年報編集委員会）。

(5) 開館記念事業

- ① 開館記念式典（2017 年 10 月 31 日）
- ② 記念事業：ナンシー・コット先生講演会シリーズ
講演会（2018 年 3 月 24 日）、セミナー（2018 年 3 月 27 日、3 月 29 日、4 月 4 日）

(6) そのほか

- ① ロゴ登録：GRL を商標登録済み。第 6049991 号
- ② カフェ：カフェ業者選定委員会で 4 件の応募者から（有）ブランパンを採択
- ③ サイン：地下鉄 1 番出口と GRL の間に大学の様式で設置（2019 年 3 月）

4. GRL への期待

設置の趣旨で示した 3 つの目的に向けて、GRL 設立から 1 年半の間、関係者の皆様の様々な努力が重ねられています。その立ち上げをお手伝いしてきた者として、これからの GRL に期待するところをまとめておきます。

目的の第一の蔵書拡充のためにこれから GRL が新規に購入して行く図書については、社会科学の流れを引き継ぐと共に、名古屋大学にある GRL としての蔵書の特色を見つけて行くことが必要です。既に図書選定委員会で、現代的課題である LGBT 等や名古屋大学に多い理系研究者を取り巻く「科学とジェンダー」などの方向性について議論が始められており、今後 GRL に集う研究者によってこれら蔵書を魅力あるものにすべく、拡充頂くことを期待します。

目的の第二のジェンダー研究については蔵書拡充の方向と同じく、名古屋大学に設置された GRL として研究の特徴を出して行くべきだと考えます。LGBT 等や、「科学とジェンダー」以外にも GRL における連携研究の中から新しい芽が出てくるに違いないと思われます。GRL にはこれまで培われたジェンダー研究のベースがありますので、その上に学

生、若手研究者が自由な発想と広い視野を持って、ジェンダー学を切り拓いて欲しいと思います。コット先生も話されたシュレジンガー図書館がそうであった様に、学内のジェンダー研究者の中からリーダーが登場し、GRL に特徴的な研究の流れが作られることも期待します。

目的の第三の連携・普及のネットワーク拠点の形成では、積極的な講演会、ワークショップの開催が活動の核となると思います。特に海外の研究者を招くことは若手、学生に大きな刺激になります。コット先生からは、歩み出したばかりの GRL は多くのことを学び、また若者も大いに刺激を受けたと思います。Diversity が新たな発展を導くことは明らかですから、学内外のより多くの人々、学生を巻き込んで行く必要があります。そのためにも、隔年でも良いので海外の研究者を招聘できる様に、これはシニアの先生方の出番かも知れません。

GRL の創設にあたっては、設立から 20 年間は東海ジェンダー研究所から運営経費が支援される計画になっています。その間に学内的にも、国内外から見ても重要なジェンダー研究の拠点に GRL を育て上げることで、GRL を Sustainable にすることが GRL 関係者の今後の最も重要な責務であると思われます。GRL 創設以来、学内に 30 名近いジェンダー研究者が居る事が分かってきており、その結集が今後の GRL の発展の力になると期待されます。一つの可能性として、研究としてのジェンダー学の研究センターを学内共同教育研究組織として創設し、専任の教員による研究組織を作ること、そして GRL をその附属図書室と位置づけるのも目標となるかも知れません。更には全国大学共同利用・共同研究拠点など夢は広がります。

最初に述べましたように本稿は『GRL Studies』の創刊号の最初に、GRL 創設に関わった者として、GRL が何のために、どんな思いで、どうやって設立されたか記録に残すことを目的に書き起こしました。私は田畑を耕し、種を頂いて苗に育てることをお手伝いしました。これから GRL 関係者の皆さんの研究の花が開き、その素晴らしい稔りがこの GRL の年報『GRL Studies』に集約されて行くことを祈って、以上を巻頭言とさせていただきます。

GRL に期待すること

西山恵美（公益財団法人東海ジェンダー研究所代表理事）

3 年余りの長い議論を経て、2017 年 11 月 1 日に「名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ」（以下、GRL）が開館を迎えましたことは、誠に感慨深く、関係各位のご尽力の賜と感謝の気持ちでいっぱいです。

GRL は、名古屋大学がキャンパスの最適地と建物（篤志家の物納寄附による）を提供され、東海ジェンダー研究所が「水田珠枝文庫」の書籍と研究所の収集した図書・雑誌・アーカイブを寄贈すると共に設立から 20 年間の運営費を寄附し、双方の代表者が運営小委員会およびその下の専門委員会に参加して運営に当たるという連携事業として出発しました。ここに至る過程では、東海ジェンダー研究所の安川悦子理事（現顧問）と尾関博子事務局長の協力が大であったと思っています。

設立経過については國枝先生が巻頭言で詳しくお書きいただいているので、設立までの多岐にわたる議論を通して合意に達したことのうち 3 点について述べたいと思います。

第一は、GRL は、名古屋大学のキャンパスにあります。が、広く一般に公開することになったことです。学問研究は、関心を持つ人の裾野を広げることによってより高い専門性を持つ研究を育むことができると思われませんが、この点はジェンダー研究の特質からも強調する必要があると思います。ジェンダー研究は、あらゆる学問領域の知の蓄積をジェンダー視点から問い直し、異なる専門分野の人々による学際的な研究も求められることが議論され、一般公開となりました。

第二は、GRL のユニークな点は、1 階と 2 階の建物全体が有機的に関連するということです。1 階に「水田珠枝文庫」を含む図書室・事務室、2 階にレクチャールームと小会議室、外国から招聘する研究者の研究室、ジェンダー研究所のスペース（会議室の名称でジェンダー研究所が借用）、男女共同参画センターのスペースなどが設置されています。GRL は、通常の図書館機能だけでなく、ジェンダーに関する議論の場ともなること、そのため、図書室内に議論もできる閲覧室 1 と閲覧室 2 を設けています。論文作成など静粛な環境で研究に集中したい利用者は、「水田珠枝文庫」の中に設置したデスク 3 席を利用することができます。内外の研究者を招聘しジェンダーに関するシンポジウム・講演会・研究会を開催する事業のためのレクチャールームと小会議室に加えて、カフェを設置し、ジェンダーに関する議論が活発に行われ、研究の進展を図ることを願って

現在の建物構造となりました。こうした建物全体の機能が GRL の目的達成に資するものと思われます。

第三は、アーカイブの重要性についてです。図書室には図書・雑誌の他にアーカイブの保管場所が設けられています。女性図書館におけるアーカイブの收藏は、研究所の有志がロンドンの「フェミニスト・ライブラリー」など女性のための図書館を視察した折の示唆に負っていますが、開館記念に招聘したコット先生もアーカイブの必要性を強調されました。研究所からもアーカイブを整理して寄贈しておりますが、今後どのようなアーカイブを收藏するかについては、図書の収集方針と共に検討課題となっています。

開館した GRL には学生、院生、若い人々の姿が目立ちます。これまで開催された講演会やセミナーでは、名古屋大学を始めとする学生たちが先輩のジェンダー研究者と真剣に議論する姿が印象的でした。今後 GRL を拠点にしてジェンダー研究を担う若い研究者の輩出が期待されます。

出発したばかりで解決すべき課題も多々ありますが、GRL が「知」の拠点として皆様に永く親しまれ、かつ役割を果たすことを切に願っています。



閲覧室 1



閲覧室 2

特集 1

女性史の過去と未来

特集 1 女性史の過去と未来

GRL開館記念講演会

ナンシー・F・コット教授 講演会・連続セミナー

日本で最初のジェンダー研究図書館の開館を記念して、ハーバード大学のアメリカ女性史を専門とするナンシー・F・コット（Nancy F. Cott）教授による講演会と連続セミナーを開催した。コット教授は、アメリカ歴史学会会長を務めるなど、歴史学の第一人者であるばかりでなく、2001年から2014年までハーバード大学ラ

ドクリフ研究所シュレジンガー図書館（The Arthur and Elizabeth Schlesinger Library）の館長を務めた研究者である。シュレジンガー図書館は、アメリカ女性史関連の資料を蒐集する図書館として100年以上の歴史があり、同時に、ジェンダー研究施設としての役割を担っている。ジェンダー関連の図書館でありつつジェンダー研究施設であることを目指すGRLと創立目的を同じにするものであり、学ぶべきことは多々ある。開館記念講演にコット教授を招聘することによって、GRLの今後のあり方について示唆を得ることも目的の一つとした。



左からコット教授、國枝参与、高橋理事

開館記念講演会「女性史の過去と未来」（3月24日於GRL 2階レクチャールーム。司会者：榊原千鶴・名古屋大学教授）において、主に19世紀及び20世紀の女性史を専門とするコット教授は、シュレジンガー図書館が自身の研究において大きな役割を果たしたことを述べられた。また、それまで学問の対象とされていなかった一般女性の歴史が学術研究として定着するまでの困難な道程、そして今後の学問的展開の可能性について有意義な話をされた。とりわけ、「歴史が社会を支えるために不可欠であるように、女性史はすべての女性学の基礎になりうる」という言葉には、女性史を切り拓いてきたコット教授ならではの強い信念が窺われるものである。

【ナンシー・コット教授来日スケジュール】

2018年3月22日（木）～4月7日（土）17日間

- 3月22日（木）来日
- 3月23日（金）レセプション
スタッフ紹介、スケジュール確認、懇談（質疑・応答含む）
- 3月24日（土）講演：「女性史の過去と未来」（通訳付き）
レセプション・パーティ
- 3月27日（火）連続セミナー第1回「図書館とジェンダー」
- 3月28日（水）名古屋大学大学院生との交流会
- 3月29日（木）連続セミナー第2回「結婚と家族制度」
- 4月4日（水）連続セミナー第3回「セクシュアリティとジェンダー」
- 4月5日（木）図書館員のキャリア研究フォーラム主催：2018年度講演会「図書館とジェンダー：ハーバード大学の女性史コレクション」（東京大学）
- 4月7日（日）離日

【ナンシー・コット教授略歴】

1945年アメリカ・フィラデルフィア生まれ。コーネル大学を卒業後、ブランダイス大学で、修士号ならびに博士号を取得。ボストン公立図書館の講師として経歴を始め、1975年からイエール大学で教鞭を取り、同大学の女性学プログラムの創設者の一人でもある。2001年から2014年まで、シュレジンガー図書館の館長を務めた。2014年からハーバード大学 Jonathan Trumbull（アメリカ史）教授である。

【主要著書】

- *Root of Bitterness: Documents of the Social History of American Women.* ed. and with an introd. by N. F. Cott. (E. P. Dutton, 1972)
- *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835.* (Yale University Press, 1977)
- *The Grounding of Modern Feminism.* (Yale University Press, 1987)
- *Public Vows: A History of Marriage and the Nation.* (Harvard University Press, 2000)
- *No Small Courage: A History of Women in the United States.* (Oxford University Press, 2000)

The Inauguration Lecture

The Past and Future of Women's History*



March 24, 2018

GRL Lecture Room

Chairperson: Chizuru Sakakibara (Nagoya University)

Prof. Nancy F. Cott

It is exciting to be able to participate in the opening of Japan's first Gender Research Library. I'm sure that it will have much to offer for researchers in numerous disciplines. A library can also be far more than a repository for books and manuscripts, as important as that basic purpose is. A library can be generative. Besides providing crucial resources, it can serve as a meeting place where people with similar interests will form connections and networks, and produce new ideas and actions that might never come to pass without the institutional base.

I am going to speak from the historical angle today. I see women's history as a basic and essential underpinning of all research in the women's studies field. Having a sense of history is a quintessentially human necessity, I think. A sense of the past is essential to construction of a present self and necessary for rational action. Just as an individual cannot operate in the world without having the capability of memory, human society can't operate without the collective organized memory that is history.

We look to the past as one way of understanding ourselves. The experience of delving into history is something like traveling in a foreign country. We can find in the past, as in a foreign culture, other human beings and the societies they construct, and we can compare them to ourselves. The social creations and cultural practices we find in the past may be very different from what we're used to. These may give rise to various reactions. We may react with antipathy — or with sympathy — even envy. Our predecessors are not like us, in many ways, yet they are like us, in certain ways, and it is

* The lecture was translated into Japanese by Junko Kobayashi (Nagoya University of Foreign Studies)

this doubleness that makes the comparisons so interesting.

History is thus a field for imagination, a field in which to examine alternative human possibilities. Of course history involves research, the finding of evidence, and interpretation, but it is likewise a field for mental expansion, again like travel. The past can show us behaviors that expand the panorama of human possibilities. Like literature or drama, history provides us with characters, actions, turning-points—and it's up to us to figure these out, to put them in coherent order, to find their usefulness as comparisons or alternatives to our contemporary scene, to turn what we find into insight.

The development of women's history begins with asking— where are the women? when we look at the past. It begins also with asserting that gender has a history: that the ways men and women have been expected to behave as men and women has been historically constructed, rather than being biologically (or divinely) given. What you find in history depends on what you look for. The traditional practice of history typically obscured women, because it assumed men were the human norm, and took men's activities as representing all human pursuits. To see women as active agents in making history required a different perspective.

I myself got interested in women's history, many decades ago, because of the women's movement in the United States, at the end of the 1960s. Like hundreds of thousands of other women, I had my eyes opened by feminist activism, and that made women's past lives fascinating to me. The movement for women's liberation, as it was then called, made me want to investigate women in history. I discovered new intellectual premises that made it possible to see women as subjects in history and agents of change as never before. I was already in graduate school then, seeking a Ph.D. in history, but a lot of women outside graduate schools also looked to the past to understand where women had come from, in order to see where women could go.

In the women's movement, academic women re-educated themselves through feminism. Scholars saw themselves as practicing a form of politics: For example, an important interdisciplinary journal called *Feminist Studies* (in which many historians published their work) used as its mission statement: "The feminist movement has demonstrated that the study of women is more than a compensatory project. Instead, feminism has the potential to reshape fundamentally the way we view the world. We wish not just to interpret women's experiences but to change women's condition. For us, feminist thought represents a transformation of consciousness, social forms, and modes of

action.”

Women’s studies was an interdisciplinary or cross-disciplinary project from the start. Within the academic field of history, it was fortunate that a new trend to look at history "from the bottom up" had recently begun. The “new social history,” as it was called, meant to look beyond the rulers and the weighty affairs of state that were conventionally central in history, and to pay more attention instead to groups and individuals who were not famous or powerful. The idea was to document the lives of ordinary people in the past, and to analyze the continuous processes of social experience. Human lives and basic interactions within ordinary families and communities became a new focus. Standard history had relegated these features of life to the realm of the “natural.” The “new social history” subjected them to historical analysis. The insights arising from the new social history came together advantageously with the women's movement.

So, when I was in graduate school, feeling inspired and energized by feminism and also able to walk through the door opened by the new social history, I sought to understand women of the past who were ordinary, not famous. I became very interested in the question of women's consciousness in the past: had women, centuries ago, been aware of themselves “as women,” and what would that look like? what would it mean? More than I acknowledged at the time, my approach was indebted to the emphasis on “consciousness-raising” in the women's liberation movement. Consciousness-raising was a political strategy; it brought women together in small groups, to share reflections on their lives. It was intended to enable the participants to recognize and to confront how they had been shaped to be “women”—that is, how they had been led to conform to expectations for femininity—and to accept the constraints imposed by femininity that contributed to sexual inequality. The larger aim of consciousness-raising was to enable women to throw off those constraints, and change the structures that maintained them.

Most of the previously written histories that I could find that gave some account of women’s lives seemed to me limited or faulty in one way or another: they didn’t convey the depth, variety, and possibility for change that I was sure must characterize women’s lives. in my youthful arrogance I distrusted previous historians’ efforts. I turned quickly to look for primary documents, items from the past. To locate women as subjects, no sources seemed more promising than documents that women in the past had written for themselves and to other women.

But how and where would I find such documents? My silent partner, so to speak,

was, a library—a repository of women’s documents. I was very fortunate. I discovered the Schlesinger Library on the History of Women in America at Radcliffe College because I lived in Cambridge, Massachusetts, at the time, where the library was located—and it was open to the public. In 1970, when I first used its resources, the Schlesinger Library was entering its decades of greatest expansion. Its resources served hundreds of scholars and activists, while the library simultaneously collected papers, newsletters, and books to keep records for posterity of the women’s movement it was serving.

By the time I found it, the Schlesinger Library had already been collecting documents of women’s history for almost thirty years. It was established in the 1940s, aiming to become “a national center for research in the historical role and cultural contributions of women in the United States... a field hitherto largely neglected by historians of both sexes” [quoting Wilbur K. Jordan, president of Radcliffe College, at the founding.]

So, very fortunately, I was able to look on the shelves of the Schlesinger and find many primary sources in published form. I was able to find didactic writings addressed to women, accounts of schools for girls, published editions of family letters, diaries that editors or family members thought important enough to publish, women’s religious narratives thought by their ministers to be usefully instructive to others—for example. This was a wealth of sources for a novice. Finding these primary sources easily at the Schlesinger in 1970 allowed me to put together readings for a successful class on U.S. women’s history. The enthusiastic reception of the material then led me to edit an anthology of documents, in a book called *Root of Bitterness: Documents of the Social History of American Women*, first published in 1972. The women’s movement gave me the questions about women’s consciousness that animated my pursuit; and the personal documents from the past that I needed were there to be found in the library. I later found additional material in local historical societies and other repositories, but if my initial search had not met the resources of the Schlesinger Library, I’m not sure what would have been the result. I can imagine that the library you are now opening in Nagoya will fill the same crucial role for a new generation.

If there is any single central premise within the research field of women’s history, it is that one must look for what women are doing— must look for women (as well as men) as historical actors and agents— in order to get a full picture of any society. But emphases within the research field in the United States have evolved over the years,

from the 1970s until now. The first impulses and ambitions in the field were simply to make women visible: to put women on the historical record, to enable women's voices to be heard, listen to them, and show women's points of view. That was not a simple endeavor. Making women visible involved broadening what had been seen as historically important— what had been seen as worth calling “history.” Because of the way history had been cast as a record of men (although without saying so) and as a record of power-holders, women had been invisible for the most part—with the exceptions of a few queens or other outstanding and singular leaders.

The historians pursuing early efforts (including myself) were very interested in power, but not very concerned with the state (by which I mean formal institutions of governance). Not formal politics but instead the household, the labor market, the street, were the relevant arenas— all non-state areas. There was a reluctance to focus on the standard political realm, because it was undoubtedly male-centered, and also because there was a magnetic appeal in discovering that the private realm had a politics of its own. That emphasis on the politics of private life (including intense interest in women's consciousness) derived from the women's liberation movement. It was also in synch with trends at that time in social and labor history, and in demographic and family history.

Women's work was at the forefront in much of the early historical research. That stemmed from an assumption that a gender division of labor characterized every society. It seemed self-evident and widely relevant that the work a person did would be crucial to the life she led, and to her overall position and status. Wage labor was of great interest but so was the unpaid labor done by women— reproductive labor in the largest sense, the reproduction and nurture of husbands and children who would be workers. It seemed clear that women's economic participation had been underestimated because it had been measured by men's standards. Historians were now refusing to measure women by men's standards and trying to re-see what women did, especially in the household, and to see its productive aspects.

These early emphases continued into the 1980s, but several major challenges then arose. Being very schematic, I will suggest that these major challenges fell in two categories. First, the challenge to the color-- the whiteness-- of women's history. Women activists of color and other scholars objected to separating gender analytically from race or ethnicity, in postulating who ‘women’ were. Their interventions broadened and deepened women's history, and made the endeavor more complex and realistic. Attention

would henceforward recognize and focus more on the intersection of gender with other forms of identity markedness. Women's differences from one another came into the foreground. So did questions about subordination and hierarchy in relations among women, as well as between women and men. When some women experienced new freedoms or opportunities, for instance, did that mean other women suffered? In 1991, legal scholar Kimberle Crenshaw first named what she called "intersectionality," to indicate that gender and race were inextricably bound together in personhood, in individuals' subjectivity as well as in their positionality and how they were viewed by other. That has since become a hallmark in women's studies in the U.S.

Second, postmodern theory had an impact on women's history as in all areas of humanistic and interpretive scholarship in the 1980s. I won't describe this large and complex set of developments except to mention two important results. One was that the work of the French historian Michel Foucault became influential. Foucault's concept of discourse proved to be crucial to historians of women, gender and sexuality. Discourse in Foucault's usage meant (roughly) ruling ideas, or knowledges, implemented in institutional forms of power, and made manifest in habits and practices. A central insight there was to see materiality in deployment of expertise or forms of knowledge.

The second and closely related result I want to mention was a shift to examining gender as a social ordering system of society as a whole. Some scholars began to contend that more was needed than to excavate women's past lives and make them visible. The ultimate goal was to see gender as a system of representation, a set of symbols, and a language of power that suffused a society. This would mean more attention to men as gendered beings—not to men in the traditional way, as if they were the representatives of society as a whole, but to men as having been shaped by a prevailing gender order to make certain choices, to act in certain ways, in relation to women and children and indeed in relation to all they did, in work or play or public life (including politics).

This new emphasis created contestation for quite a while, because historians who had entered women's history in its early years thought the new emphasis on gender and representation risked burying the political and feminist content of the field. Some objected to studying men's roles and masculinity as if both sexes were equally burdened by the gender order, rather than understanding that gender was a system of hierarchy, of domination and subordination in which men greatly benefited.

But when the dust settled, by the 1990s, it became clear that the turn toward

gender was fruitful, not destructive. It did not have to mean obfuscating attention to women, or negating questions about women's subjectivity or group identity. Questions about domination and hierarchy could be approached more inclusively when gender formation was being analyzed systematically.

Gender is a descriptive term in part: it refers to the way sex is understood in the social order. But it is also a basic set of categories in human thinking, in that the two sides of the binary— male and female, masculine and feminine— exist without specific and necessary content. They persist even when the content of each category changes over time, because what they compose is a relational structure, of each to the other. One doesn't exist without the other. Male does not exist without female, nor femininity without masculinity. They exist as categories only if and because they both are there, relative to one another— but not exactly equal. The relation between the two categories male and female is implicitly a ranking. The two implicitly indicate superiority and inferiority. The male or masculine indicates the stronger position; female or feminine indicates the weaker position, in any pairing. That is why historian Joan Scott, in a much-cited article of 1984 in the *American Historical Review*, said that gender is a “primary way of signifying power.” Gender signifiers are called on ‘naturally,’ so to speak, to rank the two sides of any divide, in order to make one side appear stronger than the other. Thus between two men in conflict, one will insult the other by calling him a sissy (or as a famous California governor did, a “girlie-man.”) Gender rhetoric extends far beyond actual relations between men and women—and those additional ways of using gender to signify power relations circle back to keep the gender order between men and women in place.

One can observe through history what I call the reproduction of gender. By that phrase I mean the repeated re-manufacture of assumptions about important differences between men and women. The gender order is never completely stable: disruptions occur. Take the example of modern wars. War disrupts roles and opportunities for the two sexes, especially on the home front, where women may take up previously men's jobs because men are in the armed forces. The sexual division of labor on the home front is purposely altered during a major war. People say “women are becoming just like men.” Or, similar disruptions happen not during wartime, but because of economic change or through social movements. Relatively soon, however, a revived version of the gender order surfaces, reasserting important differences between men—who men are and what they

do—and women. Rarely is this recrudescence exactly the same as the original. Often new elements for each sex are stressed. What is being reasserted and re-solidified is gender itself, as a form of social ordering—the pairing of difference in an implicit hierarchy.

Once women's historians began to examine the changing gender order and also to pay attention to men and masculinity, their attention also migrated toward the state. These shifts happened in the 1990s, in part, I think, in response to what was happening in contemporary U.S. politics. Right-wing political advances achieved limitations on reproductive freedom and on social welfare provisions, both of which hit needy women hard. The retrenchment in reproductive rights, especially, forced feminist historians to see the extent to which formal state power controlled decision-making in women's lives, even to the most intimate matters.

Historians of women and gender then began to examine formal governing structures and political culture far more extensively. This produced very significant work on the origins of social welfare provision in the United States, among other things. Historians now seriously considered how gender was significant in the creation of nationalism, and in political change. Gender questions about citizenship became pressing. Analyzing the levels and meanings of citizenship available to women and to men seemed to offer explanatory frameworks previously unnoticed.

Also in the 1990s, contemporary awareness of globalization brought attention to state borders and national allegiances—to transoceanic mobility, migration and immigration. “Bringing the state back in” led to thinking beyond the nation-state, to international and transnational frameworks. Imperialism became a big subject. The cross-cultural contacts and conflicts intrinsic to imperialism, especially the mixing of peoples through imperial conquerors' sexual use of indigenous women, became an area of very strong interest for historians of women and gender. Asking how imperial powers used intimate aspects of empire could be extremely revealing.

These political themes have remained very lively up to today—with deep interests in the history of sexuality, and in mass culture, added. For the future, do some directions in women's and gender history seem more promising than others? The first thing to be said, I think, is to continue efforts to discover and document women in their diverse reality. Symbols or abstractions gesturing at woman's condition are insufficient. To look for women as actors and strivers, as well as to recognize gender-specific oppressions of women, remains a critical task. It is also a fascinating and rewarding

inquiry.

The group called “women” is an internally diverse group— so much so that the historical experiences within the group range widely and have differed hugely, even while the whole group may share certain characteristics that distinguish them from men. In order to understand the past as prelude to the present, and to understand historical process, women’s lives and experiences in all their variety must be included. Even the family demands, the childbearing and childrearing that characterize most women’s lives everywhere, are not static elements; their meanings, burdens and joys vary across time, culture, religion, socio-economic level— so much so that women may be said to experience ‘gender’ differently. Nor is the diversity among women’s experiences merely random. Diversity expresses social power differentials between women of some groups and others. Women themselves come into direct conflict over what is considered best for women.

I would like to think that more knowledge about women’s history and gender history would be effective in mending major problems in our current world and making for a more peaceful world. The principal kinds of violent conflict now are not standard wars between states, but nonstate conflicts— conflicts arising from ethnic particularities, from insular nationalism, from hate groups, or tensions over the homogeneity of communities. To understand and abate the violent ethnic, religious and nationalist conflicts of the 21st century, a focus on gender and power could be constructive. Groups come into conflict for material reasons— control over territory and resources—of course. But what sustains intense conflicts between groups, and seems to guarantee that they will flare repeatedly, are belief systems, above and beyond the material. Men and women together create and sustain the cultures of identity and belonging that fuel particularistic conflicts today. The cultures, ideologies, and religious convictions that support and nourish a nation’s or an ethnic group’s identification of itself as a group, and distinguish the enemy as “other,” are produced and maintained by men and women. Understandings of gender itself take part. Definitions of honorable manhood and of respectable womanhood (and the interrelationship of the two) feed into the cluster of beliefs that compose self-identification and self-justification by a nation or ethnic group.

The conflicts scarring our world may be better understood, and resolved, by seeing such interconnections. Struggles over material resources must be seen in the context of beliefs about belonging. Belief systems, including religious convictions, are

also discourses about power over human lives and must be understood as such. The only way to get to answers that can grasp situations more adequately is to include both men and women, and to include gender itself as a system of signification. This can move us to a new phase in the utility and efficacy of all that women's history has enabled us to know.

As vast as the knowledge production in women's history has been in the past forty years, communication to a broad public has been much less effective. Relatively little has been absorbed in public awareness. Dissemination has been nowhere nearly as successful as knowledge production. Individuals have been highlighted in public focus on women's history, and while that is useful, the larger picture and results of women's determination and agency so amply documented by women's historians are little known. In Japan, the new Gender Research Library can help repair that lack, by serving not only as a resource for producing new perspectives, but also becoming a force for dissemination of new knowledge to the public.

日本語訳

女性史の過去と未来

ナンシー・F・コット

翻訳者 小林純子（名古屋外国語大学専任講師）

日本で初めてとなるジェンダー・リサーチ・ライブラリの開館に立ち会うことができ、非常に喜ばしく思います。この場所が今後、数多くの学術分野の研究者に多大なものを提供していくであろうと信じています。このような図書館は、書籍や資料を収蔵する単なるリポジトリ以上の役割を果たすことができる場所だと私は考えています。もちろん基本的な目的として、書籍や資料の収蔵は大切なことですが、図書館という場所は生成的な側面も備えています。重要な資料や文献を提供することに加え、同じような関心を持つ人々が集い、つながりやネットワークを生み出す場にもなり得ます。拠点となる施設がなければ生まれないような新しいアイデアや行動を生み出す場にもなるのです。

今日は歴史的な角度からみなさんにお話ししていきたいと思います。私にとって女性史とは、女性学におけるあらゆる分野の研究の基本、そして本質的な土台です。歴史意識を持つことは人間にとって必要不可欠なことだと思います。過去感覚を持つということが、現在の自己を構築するためにも、合理的な行動をとるためにもきわめて重要です。もし私たちに記憶する能力がなければ、日常をうまく生きていくことはとても難しいでしょう。同様に、共有され、整理された記憶がないままでは、人間社会はうまくまわっていきません。このような記憶こそが歴史です。

私たちは自分たちのことを理解する一つの方法として過去をみつめます。歴史を掘り下げていく経験は外国を旅する経験に似ていると思います。旅を通して外国の文化に出会うように、私たちは歴史という過去の中に他者や他者がつくりあげた社会を見出し、自分と比較することができるのです。過去の中で遭遇する社会的産物や文化的

慣習は、私たちが慣れ親しんでいるものとは全く違うものかもしれません。それに対する私たちの反応は様々です。反感を抱くこともあれば、共感することもあり、時には羨ましく感じることもあるでしょう。先人たちは多くの点で私たちとは違っていますが、同時に似通っている面もあります。こうした二重性こそが過去との比較を本当に興味深いものにしてくれるのです。

このように歴史学とは想像をする分野、つまり人間の持つ別の可能性について研究する分野なのです。もちろん調査をし、証拠を探し、解釈をすることは歴史学の主要な要素ですが、さらに言うならば、旅をするように、想像力を高める分野でもあるのです。過去にみる人間の行動様式によって、人間の可能性というパノラマを拡大することができます。文学や演劇のように、歴史には登場人物、行動、転換点があります。私たちが望めば、これらを深く理解し、わかりやすく順序立て、現代の状況と比較し、あるいは現代に対する別の選択肢として役立て、洞察を得るといったことができるのです。

女性史の発展は、私たちが過去を見つめる時に「女性はどこにいるのか？」と問うことから始まりました。また、女性史はジェンダーには歴史があると主張することからも始まったのです。つまり期待される男らしいふるまい、女らしいふるまいというのは、生物学的に、あるいは神によって定められているのではなく、歴史的に構築されてきたという認識です。私たちが歴史の中に何を見出せるのかは、何を探しているのかで決まってきます。伝統的な歴史学では、女性はよく見えなくなっています。男性こそが人間の基準であるという前提があり、男性の行動が人間の営みすべてを代表していると考えられてきたからです。歴史をつくりあげていく主体性を持った行為者としての女性を見出すためには、全く新たな視点が必要でした。

私自身は何十年も前に女性史に関心を持ちました。きっかけは1960年代後半の女性解放運動でした。他の何十万人という女性と同じように、私はフェミニストの運動で目が開き、過去の女性の人生に魅了されてきました。当時でいうところの女性解放運動によって、今までとは違った形で歴史の中の女性を探究したくなったのです。新たな知的な前提を発見することによって、それまでとは違い、女性を歴史の主題として、変革の担い手としてみなすことが可能になったのです。当時私はすでに歴史学の博士課程に在籍していましたが、大学院に通っていない多くの女性も、過去をみつめ、女性がどこから来たのかということを理解することで、今後女性はどこへ行くことができるのかということを考えていました。

女性運動においては、女性研究者はフェミニズムを通して自らを再教育していきま

した。学者は自分たちが政治的な実践をしているのだと考えていました。多くの歴史家が論文を発表している『フェミニスト研究』という著名で学際的な学術誌があります。そのミッション・ステートメントの一部を、女性研究と政治的实践が重なる一例として紹介しましょう。「フェミニスト運動は、女性研究が単に男性研究を補足するだけのプロジェクトではないことを示してきた。代わりにフェミニズムは我々の世界観を根本的に変える可能性を秘めている。私たちは単に女性の経験を解釈するだけではなく、女性の置かれている状況を変えることを望んでいるのだ。私たちにとって、フェミニストの考え方とは意識、社会の形態、そして行動の様式を変えることを意味している。」

女性研究は当初から学際的、あるいは多分野横断的なプロジェクトでした。幸運なことに、私がすでに研究を始めていた歴史学においても、新たな傾向として、歴史を底辺から上層部へと見ていくことが始まったばかりでした。これはつまり「新しい社会史」と呼ばれたものですが、従来の歴史学が中心に置いていた為政者や重要な国事をこえた先に目を向けて、代わりにそれほど有名ではなく、権力を持っているわけでもない団体や個人に注目するようになったのです。過去における一般人の生活を記録して、社会体験という継続的なプロセスの分析を試みたのです。普通の家族やコミュニティの中での生活や交流に、歴史学が新たに目を向けたのです。従来の歴史学はこうした人生の要素を、「自然なもの」とみなしていました。「新しい社会史」はそれらを歴史的な分析の対象にしたのです。このようにして新しい社会史から得られた洞察は、女性運動にとっても有利に作用しました。

私は大学院でフェミニズムによって感化され、活気づけられ、それと同時に新しい社会史が開けた扉をくぐることで、有名ではない一般女性の歴史を理解しようとしてしました。私は過去の女性の意識について強い関心をもつようになりました。何世紀も前から、女性は自分自身を「女性」として意識してきたのだろうか。それはどのようにとらえられ、何を意味するのだろうか、ということを考えてきました。当時はあまり意識していませんでしたが、私のアプローチは女性解放運動が重点を置いていた「意識の向上」に影響を受け、発想を得ていました。意識を向上させることは政治的な戦略でもあります。女性たちが小さなグループで集まり、その中でお互いの人生を振り返り、グループで共有することが行われました。その経験を通して参加者たちは、自分たちがどのように「女性」として形成されてきたのかに気づいたのです。つまり、女らしさという期待にいかに従順に従ってきたのか、そして、その女らしさが強い制約が、性別間の不平等につながっていたことを認識したのです。さらにそうした制約

を受け入れるよう誘導されてきたことに女性自身が気づき、向き合うようになったのです。意識の向上のより大きなねらいは、そうした制約を女性自身が振り払うことを可能にし、そうした制約を維持してきた制度を変えていくことにありました。

それまでに書かれた女性の人生に触れた歴史は、私には限定的で不完全なものに感じられました。女性の人生を特徴づけるような深みや幅の広さ、そして変革への可能性といったものを伝えるものではなかったからです。若さゆえの生意気さも手伝って、私はそれまでの歴史家の努力を信用しませんでした。その代りに私は過去の一次資料に目を向けたのです。女性を主題として位置づけるためには、過去に女性自身が自分たちのために、そして他の女性に向けて書いた資料ほど有望なものはないように思われたからです。

それではどのようにして、どこでそのような一次資料に出会うことができるのでしょうか。私の寡黙なパートナーとなってくれたのが、女性の一次資料のリポジトリとしての図書館でした。私はとても恵まれていたのです。そのころマサチューセッツ州ケンブリッジに住んでいたので、当時のラドクリフ大学で一般に公開されていたアメリカ女性史に関するシュレジンガー図書館を見つけることができたからです。初めて図書館の資料を利用したのが1970年でしたが、当時シュレジンガー図書館はその後、数十年間続く拡張期に入ったばかりでした。図書館所蔵の資料は多くの学者や活動家に活用されていましたが、図書館は同時に後世への記録として、女性運動にまつわる資料や、ニューズレター、そして書籍を収集していました。

私が出会った頃のシュレジンガー図書館にはすでに30年近くに及ぶ女性史に関する資料が集められていました。シュレジンガー図書館は1940年代に創設されましたが、創設当時のラドクリフ大学の学長、ウィルバー・K・ジョーダンはこの図書館の目的を次の様に語りました。「アメリカ合衆国における女性の歴史的役割や文化的貢献に関する研究は、男性、女性両方の歴史家によってこれまでほとんど見過されてきました。シュレジンガー図書館はこの見過ごされてきた研究を推進するための全米規模のセンターになることを目指しています。」

とても幸運なことに、私はシュレジンガー図書館の書架で多くの印刷された形態の一次資料を見つけることができたのです。例えば女性向けの教訓的な文章や、女学校に関する文献、公刊された家族間の手紙、編集者や家族が出版する価値があると考えた日記、聖職者が他の人々にも教訓的に役立つであろうと考えた女性による宗教的な物語などです。これらは当時経験が浅かった私にとって、余りある豊富な情報源となりました。1970年にシュレジンガー図書館でこれらの一次資料を容易に見つけること

ができたおかげで、私はその後アメリカ合衆国の女性の歴史を扱う授業に使う文献をそろえることができました。授業は成功し、受講生たちがこれらの文献を、熱意をもって受け入れてくれたおかげで、私は『辛苦の源：アメリカ女性社会史資料集』というアンソロジーを編集し、1972年に初版を出すことができたのです。こうして、女性運動から女性の意識について考えるようになり、そうすることで私の歴史的探究心に火がついたのです。探し出すことが必要だった過去の女性たちの個人的な資料を、出会うべくして図書館で見つけたのです。その後、地域の歴史協会や他のリポジトリなどでも別の資料を見つけましたが、資料を探し始めたその時に、シュレジンガー図書館の資料に出会っていなかったら、結果がどのようなになっていたかわかりません。このように考えると、今この名古屋に開館されようとしているジェンダー・リサーチ・ライブラリは、次世代の人々にとってシュレジンガー図書館と同じく重要な役割を果たすことになるだろうと期待しています。

女性史の研究分野の中で根幹となる前提が一つあるとすれば、それは女性は何をしているのかということを探さなければならないということでしょう。どのような社会であってもその全体像を把握するためには、歴史の主人公、および担い手としての女性、そして男性を見ていかなければなりません。しかし、アメリカ合衆国において、女性史研究の焦点は、1970年代から現在に至るまで徐々に変化し発展してきています。当初女性史研究は、それまで歴史の中で見えていなかった女性を、目に見える存在にするという大志から始まりました。歴史の中で女性を可視化するために、歴史的記録の中に女性を入れ、女性の声が聞こえるようにし、それに耳を傾け、女性の視点を示したのです。それは簡単な取り組みではありませんでした。女性を可視化するためには、歴史的に重要であると考えられてきたもの、つまり「歴史」と呼ぶ価値があるものは何かという概念自体を再考し、拡張する必要があったからです。それまで歴史とは暗黙の了解のもと、男性の記録、かつ権力を有するものの記録であると考えられてきました。そのため、数少ない女王や傑出したリーダーといった例外はありますが、総じて女性は歴史の大半において見えない存在だったのです。

当時、女性史研究を進めていた初期の歴史家—私自身も含め—は、権力に非常に興味を持っていたものの、国家にはあまり目を向けませんでした。ここでいう国家とは、正統な政治と統治機関という意味です。女性史の研究者は、正統な政治の代わりに、国家とは関係のない家庭や労働市場、街中といった領域に関心を寄せました。標準的な政治領域に焦点を当てることに消極的だったのは、そこが明らかに男性中心だったことに加え、個人の私的領域が独自の政治性を持っているという発見に魅了されたか

らです。私的な生活の政治性を重視する姿勢 ―その中に女性の意識に対する関心も含まれていましたが― は、女性解放運動から発展してきたものです。個人の私的領域の政治性は、同時期に歴史学で潮流となっていた社会史や労働史、そして人口統計史や家族史の関心ともうまく連動したのです。

多くの初期の歴史研究の中で、女性の労働は最前線で論じられたテーマでした。このことはジェンダーによる労働の役割分業がすべての社会を特徴づけるという前提から生じたものです。人が行う仕事はその人の人生や、全体的な立場、社会的地位に多大な影響を与えるということは自明で妥当なことに思われました。賃金労働は多くの関心を集めましたが、女性が担う無給の労働にも高い関心が寄せられました。女性による無給労働とは最も広い意味での再生産労働、つまり子どもを産み、夫を世話し、将来労働者となる子どもを養育していくことを指します。このような女性の経済的関与が過少評価されてきたのは、それが男性の基準で測られてきたからに他ならないでしょう。そこで歴史家は男性の基準で女性を評価することを拒み、女性が行ってきたこと、特に家庭の中で担ってきた労働を再評価し、その生産的な側面を見出そうとしたのです。

こういった初期の研究テーマへの関心は1980年代に入っても続いていきますが、同時にいくつかの大きな反論も出てきました。端的にまとめると、これらの反論は大きく二つのカテゴリーに分けることができます。第1の反論は女性史の人種、つまり「白人性」に対するものです。有色人種の女性活動家や他の学者たちは、「女性」が誰なのかという前提の中で、人種やエスニシティからジェンダーを分けて分析することに異議を唱えました。こうした異議が上がることで、女性史はさらに幅広く、深みのあるものになり、女性史の探究はより複雑かつ現実味を帯びたものとなったのです。これ以降、ジェンダーと他のアイデンティティの有徴性とが、どのように交差するのかが認識され、そこにより多くの研究の焦点が置かれるようになりました。つまり女性の中での違いが前面に押し出されたのです。同時に、女性が男性に従属していることだけでなく、女性の間での従属性や階層性にも焦点があてられるようになりました。このことで、例えば、一部の女性が新しい自由や機会を手に入れた時、他の女性が代わりに苦しんだのではないかといった問題にも光があてられるようになったのです。1991年に法学者のキンバリー・クレンショーが初めて個々の人格や主体性、立ち位置や、他者からどのように見られるかということにおいて、ジェンダーと人種が密接に結びついていることを、「インターセクショナリティ」という概念で表現しました。これ以降、この概念はアメリカ合衆国における女性研究を顕著に特徴づけるものとな

ったのです。

第2の反論は、1980年代の人文科学や解釈に関わるすべての学術分野に大きく影響を与えたポストモダン理論が女性史に与えた影響と関係します。この広大で、複雑な理論の発達と展開について詳細な説明はしませんが、ここでは重要な二つの成果について述べたいと思います。一つ目はフランスの歴史家、ミシェル・フーコーの研究の影響です。フーコーが提唱したディスコースの概念は女性やジェンダー、セクシュアリティを研究する歴史家にとって重要度を増していきました。大雑把にまとめてしまうと、フーコーが言うところのディスコースとは、制度化された権力の形態を通して行使され、慣習や実践を通して顕著に表れてくる支配的な考え方、知識のことを指します。ここで中心となる洞察は、専門性や様々な知識の形態が動員され使用される様は具体性を持った実体として検証することができるということです。

このことと密接に関わりますが、もう一つのポストモダン理論が女性研究に及ぼした影響は、ジェンダーを全体的な社会秩序の体系として研究するようになったことです。女性の過去の人生を掘り起し、目に見えるようにする以上のことが必要だと主張する研究者も出てきました。究極的な目標は、ジェンダーを表象体系として、一連のシンボルとして、そして社会に蔓延する権力の言語体系として見なすことでした。このことは男性についてもジェンダー化された存在として検証の目を向けることを意味しています。ここで注目する男性とは、伝統的な意味での、人間社会全体の代表としての男性ではなく、支配的なジェンダー秩序の中で、特定の選択をし、行動をとるよう形作られてきた男性のことを指します。女性や子どもに対してはもちろん、仕事や遊び、政治を含む公的な場面などのあらゆる状況で特定の選択をし、特定のふるまいをするよう形成されてきた男性に対して着目するのです。

この新たな関心に対して、しばらくの間論争が巻き起こりました。初期の頃から女性史研究に参入した歴史家は、ジェンダーと表象が新しく注目されるようになったことで、この分野の政治的でフェミニスト的な内容が埋もれてしまうのではないかと恐れたからです。男性の役割や男らしさを研究対象とすることで、ジェンダー秩序があたかも男性、女性に対して等しく負担を負わせているかのような印象を与えるのではないかと危惧する研究者もいました。ジェンダーを支配と被支配からなる階層性の制度として、そしてその中で男性が多大な恩恵を享受している制度として理解することが曖昧にされてしまうのではないかとという理由で、男性の役割や男らしさを研究対象とすることに反対する人もいました。

しかしこういった大きな論争も1990年代には落ち着きを見せ、ジェンダー分析への

方向転換は実りあるもので、破壊的なものではないことが明らかになりました。この方向転換が女性への関心をうやむやにしまうわけではなく、女性の主体性や女性としてのグループのアイデンティティに関する問いかけを否定するわけでもないことがわかったのです。ジェンダーがどのように形成されたのかを体系的に分析することで、支配と階層性に関してもより包括的に取り組むことができるようになるのです。

ジェンダーは記述用語であるとも言えます。つまりそれは社会的秩序のなかで性がどのように理解されているかを示します。同時にジェンダーは人間の思考における分類の基本的なセット（対）でもあります。その対のなかで、男性と女性、男らしさと女らしさは対極に置かれ、具体的な、あるいは必要な中身がなくてもカテゴリーとしては存在し得るのです。それぞれのカテゴリーの内容が時とともに変化した後でさえも、対極に置かれた男性と女性、男らしさと女らしさは存在し続けます。互いを必要とする相互的な構造によって、これらのカテゴリーが構成されているからです。一方は他方なくして存在し得ません。男性は女性なくして存在せず、女らしさは男らしさなくして存在しません。相互性のある他方なくしてこれらのカテゴリーは存在し得ませんが、お互いの関係性は対等ではありません。男性と女性というカテゴリーの関係は暗黙のうちに順位付けされ、優劣を内示します。どのような組み合わせにおいても、男性や男らしさはより強い立場を示し、女性や女らしさは弱い立場を表します。これが歴史家、ジョーン・スコットが、1984年に『アメリカ歴史評論』で発表し、頻繁に引用される論文の中で、ジェンダーとは「基本的な権力の表し方である」と述べた所以です。ジェンダーが指し示すものは、ある意味「自然に」使われています。二つに分かれているものを順位付け、一方を他方よりも強く見せるように使われています。ですから対立している男性同士で、一方が他方を「女々しいやつ」と侮辱するのです。有名な元カリフォルニア州知事のアーノルド・シュワルツェネッガーが対立候補に対して「女々しい男」を意味する“girlie-man”という言葉を使ったことは有名です。ジェンダーにまつわるレトリックは実際の男性と女性の間をはるかに超越して使われるのです。このような力関係を示すためにもジェンダーが使われることが、巡り巡って、実際の男性と女性の間でジェンダー秩序を維持し続けることにつながります。

歴史の中では私が「ジェンダーの再生産」と呼んでいる現象を見ることができます。「ジェンダーの再生産」とは、男女間の重要な違いに関する思い込みが、繰り返し再生産されることです。ジェンダー秩序は完全に安定化することではなく、混乱もしばしば起こります。近現代の戦争を例にあげてみましょう。戦争は特に銃後の社会で、男女間の役割や機会を大きく混乱させます。男性が軍隊に入った銃後の社会では、それ

までは男性の仕事と思われていた職業に女性が就きます。このような性別役割分業の変更は大きな戦争において、意図的に行われています。そのような状況に対して「今や女が男のようになりつつある」といった反応をよく耳にします。また、このようなジェンダー秩序の混乱は戦争以外にも、経済的な変革期や社会運動の際に起こります。しかしそうした状況から少し時間が経つと、すぐにまたジェンダー秩序のリバイバル版が表面化し、男女間の重要な違いが主張され始めます。このリバイバルしたジェンダー秩序が以前のジェンダー秩序と全く同じということはめったにありません。男性、女性それぞれに新たな要素が付け加えられ、強調されます。こうした変化の中で変わらないもの、再び主張され、再固定化されるものは、男女の違いに暗黙の階層性を内包した、社会秩序を形成するジェンダーそのものです。

女性史を専門とする歴史家が変わりゆくジェンダー秩序を検証し始め、男性や男らしさにも注目するようになるにつれ、国家に対しても目がむけられるようになりました。1990年代に起こったこのような動きは、当時のアメリカの政治状況への反応でもあったと考えられます。右派勢力の台頭で、性と生殖に関する自由は制限され、社会福祉が削減されたため、そのどちらもが特に貧困に苦しむ女性を直撃しました。フェミニストの歴史家は、リプロダクティブ・ライツが縮小されていくことを目の当たりにして、最も個人的で性的な事柄においてさえ、女性の意思決定がいかに関国家権力によって掌握されているかを認識したのです。

女性とジェンダーに関する歴史家はその後、公的な統治の構造や政治の文化についてより広範囲にわたって研究を始めました。こうした取り組みによって多くの研究成果が生まれています。その中で例としてあげられるのが、アメリカ合衆国における社会福祉の起源における女性の役割についての研究です。また、今では歴史家はナショナリズムの構築や政治的変革において、ジェンダーがいかに関重要な役割を果たしているかを真剣に検討しています。さらに市民権におけるジェンダーの影響も重要視されるようになりました。市民権が内包する様々なレベルや市民権の意味が、ジェンダーの違いによってどう異なるのかを分析することで、歴史家はこれまで見過ごされてきた解釈の枠組みを新たに提示しています。

1990年代にはさらに、グローバリゼーションに対する意識が高まったことともあいまって、研究においても国境や国家への忠誠、すなわち海を横断する移動や、人々の移動、移民といった問題に目が向けられるようになりました。「国家を取り戻す」ことが、ひいては国民国家を超えて国際的な、トランスナショナルな理解を深める解釈の枠組みへとつながっていきました。ここで大きな研究対象のテーマとなったのが帝

国主義です。本質的に帝国主義が内包する異文化の遭遇と対立、その中でも特に帝国主義的征服者が先住又は現地の女性を性的に利用することから生じる人種の混合といった問題に、女性とジェンダーを専門とする歴史家は強い関心を示しました。帝国主義の権力がどのように帝国内の私的、性的な側面を利用したのかを問うことは、この上なく啓発的になり得ると考えています。

これらの政治的なテーマは、近年高まりを見せているセクシュアリティの歴史と大衆文化とともに、今日に至るまで活発に研究で取り組まれています。ここで視点を未来に移してみましょう。将来、女性とジェンダーの歴史研究における方向性の中で、より重要で期待がよせられるようになるものはあるのでしょうか。このことを考えた時に私がまず言いたいことは、女性の多様な現実を発見し、記録していく努力は継続的に行われるべきだということです。女性に関するシンボルや抽象論だけでは不十分なのです。主体性を持って戦った女性たちを探し出し、ジェンダー特有の女性の抑圧を理解していくことは、今なお重要な作業です。これはまたとても興味深く、やりがいのある探求でもあります。

この「女性」と呼ばれるグループは、その内部が多様性に富む集団です。男性と比べた時に、グループ全体が一定の特徴を共有するかもしれませんが、多様性に富む女性たちの歴史的経験は広範囲に及び、女性同士を比べた時に彼女たちの経験は大きく異なります。現在へのプレリュードとして過去を理解し、歴史的過程を理解するためには、すべての多様性を含む女性の人生について考えていかなければなりません。世界中のいたるところで多くの女性の人生を特徴づけている家事、出産、育児でさえも、変化や違いのない静的な要素ではありません。その意味合い、負担、喜びは、時代、文化、宗教、社会・経済的レベルによって異なります。このような女性の中にある差異によって、女性はジェンダーを違った形で体験すると言えるでしょう。同時に、女性の体験の多様性は不規則に存在しているわけではありません。多様性は女性の中のあるグループと別のグループの間の社会的権力の違いを示しています。女性たち自身、女性にとって何がベストなのかという問いを巡って大きく対立してきました。

私自身は女性とジェンダーの歴史に関する知識がより深まることで、今世界が体験している主要な問題の解決に効果的に貢献できるのではないかと、さらには世界をもっと平和にできるのではないかと感じたいのです。現在の主要な暴力的紛争は典型的な国家間の戦争ではなく、民族排他主義や狭量なナショナリズム、ヘイト・グループ、またはコミュニティの同質性をめぐる対立から生じた非国家間の紛争です。民族的、宗教的、ナショナリスト的な21世紀における暴力的な紛争を理解し、和らげるために、

ジェンダーや権力に焦点を当てていくことが建設的だと私は思っています。グループ同士は多くの場合、領土や資源の掌握などの物質的理由をめぐって対立します。しかし、こうした対立が激しさを増し、維持される理由、何度もくりかえされる構造となっている理由は、物質的理由を超越した信念体系があるからです。性別に関わらず、男性も女性も、今日の排他主義的な紛争をあおるかのような、アイデンティティと所属意識の文化を作りだし、維持しています。自分たちに国や民族など、一つのグループへの帰属意識を持たせ、敵を「他者」として識別することを支えている文化やイデオロギー、および宗教的信念といったものは、男性と女性双方によって生み出され、維持されているのです。ジェンダーそのものを理解していることも重要になってきます。名誉ある男らしさと尊敬される女らしさの定義、そして両者の相互関係は、ある国家もしくは民族による自己認識と自己正当化を構成する一連の信念体系のなかに組み込まれていくからです。

このような相互のつながりを解明することで、世界に傷跡をのこす紛争に対する理解がより進み、解決に近づくかもしれません。物質的資源をめぐる対立は所属についての信念という文脈の中で検証されなければなりません。宗教的信念を含む信念体系もまた、人間の人生に対する権力をめぐるディスコースであり、そのように理解されなければなりません。状況をより適切に把握し、的確な答えを出していくためには、男性と女性の両方を視野に入れ、意味の体系としてのジェンダーを考察に含めることが必要です。こうすることで、私たちは女性史が教えてくれた実用性と有効性を、新しい段階へと到達させることができます。

過去40年間にわたる女性史の知識の産出は膨大な量に及びますが、一般社会に対してその知識を伝えていくということはそれほど効果的に行われていません。一般の人々の意識まで浸透したことはとても少ないのです。知識の生産が成功したことに比べ、生産した知識の普及はそれほど進んでいません。一般向けの女性史では、歴史上の一部の個人だけが脚光を浴びてきました。それはそれで有益ではあるのですが、女性史研究者が詳細に記録してきた女性たちの意志と主体性が描き出す大きな構図や結果はほとんど一般に知られていないのです。日本で新しく開館するジェンダー・リサーチ・ライブラリが、新しい視点を生み出すことにつながる資料を提供する場所としてだけでなく、新しい知識を一般に普及していく動力となっていくことで、一般の人への知識の普及にも貢献していただくことを望みます。

ナンシー・F・コット教授連続セミナー

GRL 2 階レクチャールーム

講演会に続いて三回開催されたコット教授セミナーでは、講師と参加者の間で活発な議論がおこなわれ、今後 GRL がジェンダー研究の新たな知の拠点として発展することが予見された。

第 1 回 2018 年 3 月 27 日 (火) 「図書館とジェンダー」

司会者 新井美佐子 (名古屋大学)

コメンテーター 青木玲子 (東海ジェンダー研究所)

(逐次通訳あり)

コット教授はハーバード大学ラドクリフ研究所シュレジンガー図書館の館長を長年務められた経験に言及しつつ、女性図書館の設立が女性運動と不可分な一つの運動であったことを歴史的に語られた。さらに、女性図書館がその存在意義を打ち出すためには、図書館がどのような収蔵方針を定めるかが重要であるとも指摘された。これはジェンダー専門図書室としての GRL の今後のあり方を考える上でも示唆に富むものであったと言える。



コット教授セミナーの様子

第2回 2018年3月29日(木)

「結婚と家族制度」

司会者 田村哲樹(名古屋大学)

コメンテーター 金子幸子(元名古屋短期大学教授)

婚姻史が専門でもあるコット教授は、結婚の歴史を紐解きながら、結婚が私的なものであると同時に公的な側面を持つものであることを示した。それは、結婚によって権利義務関係を持った「市民」が形成されるが故である。結婚に伴う法規制によって、女性は結婚と同時に市民権を失う時代が長らくあったことにも言及された。セミナー参加者との議論では、そもそも結婚の本質をどこに見たらよいかという論点まで掘り下げられた。

第3回 2018年4月4日(水)

「セクシュアリティとジェンダー」

司会者 武田貴子(東海ジェンダー研究所)

コット教授はセクシュアリティが非政治的なものであるという想定を批判しつつ、ここ数十年間のセクシュアル・マイノリティの権利を求める運動とそれを報道するメディアがどのように変遷したのかをスライドとともに示された。男と女という二項対立的なジェンダー観から、ジェンダーの定義が拡大し多様になったことや、同性婚の例を上げ、2011年を境としてそれに対して肯定的に捉える人の数が否定的に見る人の数を上回るようになったという調査の結果を明らかにし、メディアの取り扱い方にも同様の大きな変化があったことに言及された。

上述の開館記念講演会、及び連続セミナーには、いずれも学内外から多くの参加者があり、廊下まで聴衆のあふれ出す日もあった。講演・セミナーの他に、名古屋大学の院生との交流会にも快く応じられ、アメリカや日本、アジアのジェンダーの現状やジェンダー学等について気さくにお話しくださった。また、教授を交えての昼食会・夕食会には東京や京都等の遠方からも友人・知己が多く集い、教授が日本人研究者との交流を長きにわたり大切にしてくられたことがうかがわれた。なお、教授からは帰国後、以下の書籍（計 14 冊）寄贈の申し出も頂き、有り難く受領した。いずれも GRL 図書室において利用可能である。



学生と談話中のコット教授

【ナンシー・コット教授寄贈図書リスト】

- Georges Duby and Michelle Perrot, general editors. *A History of Women in the West*. (Belknap Press of Harvard University Press, 1992-1995.)
 - v.1 Pauline Schmitt Pantel, editor; Arthur Goldhammer, translator. *From Ancient Goddesses to Christian Saints*.
 - v.2 Christiane Klapisch-Zuber, editor. *Silences of the Middle Ages*.
 - v.3 Natalie Zemon Davis and Arlette Farge, editors. *Renaissance and Enlightenment Paradoxes*.
 - v.4 Geneviève Fraisse and Michelle Perrot, editors. *Emerging Feminism from Revolution to World War*.
- sous la direction de Georges Duby et Michelle Perrot. *Histoire des Femmes en Occident*. (Plon, c1991-c1992.)
 - 1 sous la direction de Pauline Schmitt Pantel. *L'Antiquité*.
 - 2 sous la direction de Christiane Klapisch-Zuber. *Le Moyen Âge*.
 - 3 sous la direction de Natalie Zemon Davis et Arlette Farge. *XVIe-XVIIIe siècles*
 - 4 sous la direction de Geneviève Fraisse, Michelle Perrot. *Le XIXe siècle*.
 - 5 sous la direction de Françoise Thébaud. *Le XXe siècle*.
- Martha Banta, *Imaging American Women : Idea and Ideals in Cultural History*. (Columbia University Press, c1987)
- 鈴木七美著『出産の歴史人類学：産婆世界の解体から自然出産運動へ』（新曜社、1997）

- ・ カール・N・デグラールほか著、立原宏要・鈴木洋子訳『アメリカのおんなたち：愛と性と家族の歴史』（教育社、1986.9.）
- ・ G・デュビィ、M・ペロー監修、杉村和子・志賀亮一監訳『女の歴史』5 20世紀1、2（藤原書店、1998）

特集 2

ジェンダー研究機関の
過去・現在・未来

特集2 ジェンダー研究機関の過去・現在・未来

GRL 開館一周年記念シンポジウム

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（以下、GRL）が 2018 年 11 月に開館一周年を迎えたことを機に、ジェンダー研究機関の運営に携わられている研究者の方々を講師に招き、各研究機関の創設の経緯、主な活動、運営上の課題等について紹介いただくとともに、GRL の今後に示唆をいただくシンポジウムを開催した。以下、記念シンポジウムのプログラム、及び基調講演、パネルディスカッションの概要を記すとともに、GRL スタッフの榊原千鶴（名古屋大学男女共同参画センター教授）が、今後の GRL の活動について記した。

◆ プログラム

- シンポジウム「ジェンダー研究機関の過去・現在・未来」

日時：2019 年 1 月 11 日（金）

場所：名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ 2 階レクチャールーム

司会者：新井美佐子（名古屋大学人文学研究科准教授）

- 基調講演「大学における女性学・ジェンダー研究センターの役割と課題」

講師：伊田久美子（大阪府立大学女性学研究センター長・教授）

- パネルディスカッション

パネリスト：

石井クンツ昌子（お茶の水女子大学ジェンダー研究所長・教授）

松岡悦子（奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター長・教授）

高松香奈（国際基督教大学ジェンダー研究センター長・准教授）

- GRL の活動紹介

榊原千鶴（名古屋大学 GRL スタッフ・教授）

◆ 概要

● 基調講演

「大学における女性学・ジェンダー研究センターの役割と課題」

講師：大阪府立大学女性学研究センター長 伊田久美子（同大学教授）

伊田氏による基調講演では、四半世紀にわたる歴史を有する大阪府立大学女性学研究センターの沿革と活動実績、課題が紹介された。

同センターは、1996年に大阪女子大学の研究機関として設置された。2005年には、大阪女子大学と大阪府立大学の統合に伴い、大阪府立大学人間社会学研究科の研究機関となり、2011年の組織改正により、大阪府立大学地域連携研究機構のセンターに位置づけられ、現在に至っている。

大阪女子大学がセンターを設置した背景には、同大が1982年という日本では早い時期に女性学の授業を始めたこと、女性学の授業担当スタッフが中心となり、女性学研究資料室を開設（1990年）するなどの実績の積み重ねがあった。

伊田氏は、女性学・ジェンダー研究の意義として、「女性の視点や経験からの学問研究の見直し」、「女性だけでなく、男性のあり方や男女の関係性の視点からの学問研究の見直し」を上げ、分野を問わず、学問研究の基盤における必要性を指摘する一方、そうした認識が、学内でなかなか理解されづらい現状にも言及された。

同センターの主な活動としては、女性学講演会の開催、『女性学研究』の発行、国際交流事業、大阪府および府内自治体・企業との連携事業などが上げられるが、特筆すべきは、教育への貢献である。

具体的には、センター共同研究員によるオムニバス授業としての一般教養科目「ジェンダー論への招待」、卒業論文作成も可能なジェンダー論ゼミ、ジェンダー論関連専門科目などの学部教育、大学院教育としての人間科学専攻ジェンダー論等、初年次教育から大学院教育に至るまで、段階的かつ多層的に計画、開講されている。

こうした教育と緊密な連携を大きな柱とするセンターの活動は、次世代のジェンダー理解に重要な役割を果たすものだが、継続的推進のためには、予算や担当スタ



伊田久美子氏

ップの確保、大学の方針との関係、あるいは独立性と開放性のバランスをいかに図っていくかなど、課題も多い。

今後もセンターが、教育への貢献とともに、自由かつ自立した形で、学内外のジェンダー研究者に、交流と共同研究の場を提供していくものであることを期待するところに、長年にわたりセンターの活動を担い、組織改正のなかでもその存在を維持継続させてきたセンター長ならではの思いを感じた。

● パネルディスカッション



左から、伊田久美子氏・石井クンツ昌子氏・松岡悦子氏・高松香奈氏

パネルディスカッションでは、各研究機関の紹介と課題についてお話しいただいた。

◇ お茶の水女子大学ジェンダー研究所長 石井クンツ昌子（同大学教授）

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、1975 年設立の女性文化資料館に遡る。1986 年に女性文化研究センターに改組し、1996 年には国際的なジェンダー研究をめざすジェンダー研究センターとなった。そして現在は、グローバルリーダーシップ研究所とともに、2015 年度新設のグローバル女性リーダー育成研究機構を構成する研究所となっている。

グローバルリーダーシップ研究所は、女性リーダー育成に必要な教育方法の開発・カリキュラムの策定と実践を目的とする。それに対してジェンダー研究所は、学術・学際的なジェンダー研究の推進、男女共同参画社会の実現を目的としており、両者の連携と共同プロジェクトの実践は、課題のひとつであるという。

国際シンポジウムの開催、年間 2～3 名、滞在期間 2 ヶ月～1 年という主に海外からの特別招聘教授による研究プロジェクトや大学院授業、投稿資格をオープンにしてグローバルなプラットフォームをめざす『ジェンダー研究』の刊行など、国際的な教育研究拠点の形成をめざすという目標の明確化と、諸事業を推進しうるスタッフの充実ぶりが印象的であった。

◇ 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター長 松岡悦子（同大学教授）

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センターは、2001年に同大の生活環境学部より構想が提案され、2005年に、アジアにおける女性の高等教育の発展に貢献し、ジェンダーに関する研究の促進を目的とする機関として設置された。2009年にはセンター独自の場を確保し、特任助教1名を配置するに至った。

国際シンポジウム、セミナー、講演会の開催とともに、学生の海外研修、女性史学賞事業、研究助成事業などを行っている。なかでも、研究助成、論文投稿誌としての『アジア・ジェンダー文化学研究』の刊行、協力研究員というポジションの提供は、段階的な若手研究者の育成システムとなっており、同センターの特徴といえる。

現在運営費の大半は大学予算に依存しているが、今後センターとしての独立性を保つためには、外部資金の獲得を目指すことが課題になる。今後どのような活動を展開し、ジェンダー研究の拠点となっていくかなど課題はあるものの、アジアを軸にジェンダー研究を推進し、若手研究者の育成と研究の活発化をめざしている。

◇ 国際基督教大学ジェンダー研究センター長 高松香奈（同大学准教授）

国際基督教大学ジェンダー研究センターは、ジェンダー・セクシュアリティの研究に関心がある人たちすべてに開かれた新しいコミュニケーションスペースとして、2004年に発足した。

同センターは、教養学部のみからなる国際基督教大学のリベラルアーツ教育において、ジェンダー・セクシュアリティ研究を発展させていくこととともに、誰もが安心できる居場所となることをめざしている。

主な活動としては、シンポジウムや講演会、国際ワークショップ等の開催、『Gender and Sexuality』の刊行のほか、「ふわカフェ」、読書会やティーパーティーの定期的な開催といったユニークな企画も行っている。また、NPO 法人との共同調査「nijiVOICE2018～LGBT も働きやすい職場づくり、生きやすい社会づくりのための「声」集め～」の実施など、ジェンダー・セクシュアリティに関する学びと議論の場として、学内外からの注目度も高い。

◆ 今後の GRL の活動に向けて

榊原千鶴（名古屋大学 GRL スタッフ・教授）

今回発表いただいた研究者の方々は、機関創設から現在に至るまでの活動を通して、たとえば、教育への貢献、国際性の獲得、若手育成、学びと議論の場など、それぞれの特徴を活かしつつ、機関の運営にあたられている。さまざまな経験、実践の上に築かれた強みを何うなかで、GRL としては今後、どこに独自性を見だし、強みとして育てて行くことができるかが、課題であると感じた。

GRL において、現時点での独自性のひとつは、ライブラリ機能である。シンポジウム、講演、セミナーなどによる議論、交流の「場」とどまらず、ジェンダー研究文献の蒐集・保存・提供というライブラリ機能をいかに整備し、研究活動施設としての可能性を広げていくことができるか。

たとえば、蔵書の制約を乗り越える試みのひとつとしては、すでに国立女性教育会館女性教育情報センターの協力を得て、図書パッケージ貸出サービスを活用しているが、今後、選書やコレクション蒐集などについても、他機関、研究者との情報共有、連携が不可欠である。

今回のシンポジウムでは、大学予算による運営費の獲得維持も話題にあがった。GRL は現在、公益財団法人東海ジェンダー研究所より、開館後 20 年間の運営費を寄附いただく予定のため、将来を見据え、中長期的な視野での事業計画を立てていくことが重要となっている。

運営は、専任スタッフ 3 名（研究員 1 名、司書 1 名、事務補佐員 1 名）とサポートスタッフ、兼任教員および各種委員会委員が担当しているが、全学的な連携協力体制の構築はいまだ途上であり、今後の課題である。一方、プラスの要素としては、学生の参画が上げられる。サポートスタッフとして GRL の運営に携わることを希望する学生は多く、2019 年 3 月までにライブラリ業務を担当した学生は 9 名、所属は 4 研究科で、全員がジェンダー研究に関わる専門をもつ後期課程の大学院生である。博士論文執筆中の彼らが、カウンター業務やライブラリのレイアウトなど、彼らなりのやり方で GRL の魅力を伝えていくことは、ジェンダー研究の裾野拡大に効果的というだけでなく、若手研究者の育成にもつながるものといえる。

今回のシンポジウムを通じて、各研究機関の方々から、生き残っていくための戦略、運営上の課題を直接伺うことができたのは、何よりの収穫であった。ぜひ今後

活動報告

活動報告

連続セミナー「LGBT とセクシュアリティからジェンダーを考える」

GRL では、2018 年度の連続セミナーとして、全 4 回から成る「LGBT とセクシュアリティからジェンダーを考える」を実施した（会場は、いずれも GRL 2 階レクチャールーム）。名古屋大学が 2018 年 5 月に「LGBT 等に関する名古屋大学の基本理念と対応ガイドライン」を作成、公表（名古屋大学ホームページで公開中）したことを受け、名古屋大学構成員を主対象に、学外から専門の講師を招き、LGBT をはじめとするセクシュアル・マイノリティ研究の最前線を学ぶことを目的とした企画である。以下に各回の要約を記しておく。なお、セミナー開催日の前後には、GRL 1 階図書室に関連文献や講師の著書を紹介するコーナーを設け、参加者の理解がより深まるよう配慮した展示を試みた。こうした GRL ならではの有機的な取り組みは、来場者からも好評であり、今後一層の工夫を重ねていきたい。

◆ 第 1 回 2018 年 7 月 20 日（金）

「ジェンダー/セクシュアリティ研究の古くて新しい課題たち—生物学、性教育、LGBT をめぐって」

加藤秀一（明治学院大学社会学部・教授）

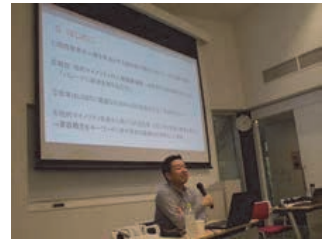


かつての「ジェンダー・フリー」教育やリベラルな性教育へのバッシングに対し、人文社会科学が適切な反論をしてこなかったという反省と、性差別・性抑圧に立ち向かうための方向性が示された。また、ジェンダーやセクシュアリティを学ぶ際に、性差についての生物学的知見とどのように付き合っていくべきかという、本連続セミナーの土台となるアイデアを提供して頂いた。

◆ 第2回 2018年9月29日（土）

「寛容の罨—なぜ府中青年の家裁判はゲイ
（・メディア）から批判されたのか」

風間孝（中京大学国際教養学部・教授）



「府中青年の家」裁判に対するゲイ・メディアからの反応やLGBT バッシングを通して、異性愛中心社会からの「寛容」を切り口にして講演された。セクシュアル・マイノリティが社会に対してその存在を「寛容」に受け入れてもらう、という構図からの脱却が必要であることが指摘された。

◆ 第3回 2018年11月16日（金）

「セクシュアル・マイノリティの社会運動—なぜ連帯は難しいのか」

森山至貴（早稲田大学文学学術院・専任講師）

日本におけるセクシュアル・マイノリティについて、その内部におけるさまざまな相違点が浮き彫りにされ、さらに社会運動にも言及された。そして、セクシュアル・マイノリティの社会運動の中で分離されつつあった承認と再分配とを再び結びつけることの重要性が強調された。



◆ 第4回 2019年2月9日（土）

「マイノリティの情報保障—性的少数者を例として」

小澤かおる（首都大学東京・客員研究員）

セクシュアル・マイノリティが孤立感と不安感を覚えやすいために、「当事者コミュニティ言説への接続」と「情報取得」が必要であることが主張された。また、カナダやアメリカなどの事例を引きつつ、セクシュアル・マイノリティが自らのアイデンティティを肯定するために、博物館、図書館、アーカイブなど当事者たちが安全に集う「公共の場」が果たし得る役割についても示唆された。



水田珠枝氏フェミニズム基礎理論講座

GRL 1 階図書室の「水田珠枝文庫」に蔵書を寄贈下さった水田珠枝氏を講師に、全 3 回の「フェミニズム基礎理論講座」を 2018 年秋開催した。周知のように水田氏は、日本におけるフェミニズム研究の碩学であり、いずれの回も会場の GRL 2 階レクチャールームが満席となる盛況であった。参加者は文字通りの老若男女で、フェミニズム・ジェンダー研究者層の厚みを感じさせた。



水田珠枝氏

ジェンダー研究の基礎となるフェミニズム理論、およびフェミニズム史について、社会思想の古典から、現代にも残る基本的課題をも扱った広範な内容の講義に対し、毎回多くの質問が寄せられ、水田氏、および司会を務めた安川悦子氏（名古屋市立大学名誉教授／公益財団法人東海ジェンダー研究所顧問）から丁寧な回答があった。各回の概要は以下の通りである。

◆ 第 1 回 2018 年 9 月 14 日（金）

「フェミニズムの生誕—18 世紀」

近代における社会変化とそれに呼応した近代思想の変化をホップズ、ロック、ルソーに則して解説された後、オランプ・ドゥ・グージュとメアリ・ウルストンクラフトというフェミニズムの二人の先駆者について講義がなされた。特に、ウルストンクラフトについては、彼女の生い立ちから 18 世紀の自然権思想との関連まで、多岐にわたって掘り下げられた。



会場の様子

◆ 第2回 2018年10月12日（金）

「フェミニズムの論争—19世紀、功利主義とマルクス主義を中心に」

功利主義とマルクス主義という19世紀を特徴づける社会思想が、とりわけ女性の参政権についてどのように論じていたのかという話を中心であった。水田氏は、ただ単に「誰が何を言った」ということだけでなく、なぜそのような思想が生まれてきたのかということ、時には軽い冗談も交えながら話すことで、聴衆を惹きつけていた。

◆ 第3回 2018年11月9日（金）

「生産と再生産の再構成—20～21世紀、個人・家族・社会および国家」

福祉国家化、帝国主義化、新自由主義化といった現代につながる社会変化が、女性をどのように位置づけるものであったのかがテーマであった。水田氏は、フェミニズムの今後のためには、男女両性の意識変革のみならず、家父長制家族からの脱却や、女性の経済的自立と家事労働の社会化が鍵になると指摘された。

【水田珠枝氏略歴】

1929年東京都生まれ、津田塾専門学校卒業、名古屋大学法学部政治学科卒業、同大学院法学研究科修士課程修了、同大学法学部助手、東海女子短大助教授、名古屋経済大学経済学部教授、同大学名誉教授、法学博士（名古屋大学）。公益財団法人東海ジェンダー研究所顧問。

【主要著書】

著書・監修：

『女性解放思想の歩み』（岩波新書、1973）

『女性解放思想史』（筑摩書房、1979）

『ミル「女性の解放」を読む』（岩波書店、1984）

『社会主義思想史』（水田洋との共著）（東洋経済新報社、1958）

『世界女性学基礎文献集成』明治大正編全15巻（ゆまに書房、2001）

『世界女性学基礎文献集成』昭和初期編全15巻（ゆまに書房、2001）

訳書：

E.シュルロ『変革期の女性』（平凡社、1972）

V.クライン『女とは何か：イデオロギーの歴史』（新泉社、1982）

「2018 年度 ジェンダー研究集会開催助成金」受託報告

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）では、国内外のジェンダー問題に関する研究の普及、推進が期待できる集会に対して、年間 3 件程度、開催費の一部（上限 20 万円、但し飲食を除く）を助成することとした。

2018 年度については 4 件の応募があり、審査の結果、次の 2 件を採択した（※ 2019 年度の募集要項は p. 89 を参照）。

- ◆ 映画「Aliko and Ambai（アリコとアンバイ）」日本上映会
—映画「Aliko and Ambai」から考える伝統的社会とジェンダー—

開催責任者：高橋麻奈（名古屋大学男女共同参画センター特任助教）

主催機関：“Aliko and Ambai” 日本タスクフォースチーム

助成金額：200,000 円

- ◆ 大学におけるセクハラ・性暴力について
開催責任者：森 桃（名古屋大学文学部 2 年）
主催機関：HeForShe Student Club Nagoya University
助成金額：150,000 円

【活動報告及び成果の概要】

◆ 映画「Aliko and Ambai（アリコとアンバイ）」日本上映会

—映画「Aliko and Ambai」から考える伝統的社会とジェンダー—

高橋麻奈（名古屋大学男女共同参画センター特任助教）

○名古屋上映会 Q&A セッション

第1回：2018年10月26日（金）18：00～20：00

名古屋大学アジア法交流館 AC フォーラム

第2回：2018年10月27日（土）17：00～19：00

名古屋大学 GRL Café Blanc

○東京上映会 Q&A セッション

第1回：2018年12月14日（金）19：00～21：00

東京都千代田スポーツセンター 映写ルーム

第2回：2018年12月15日（土）14：00～16：00

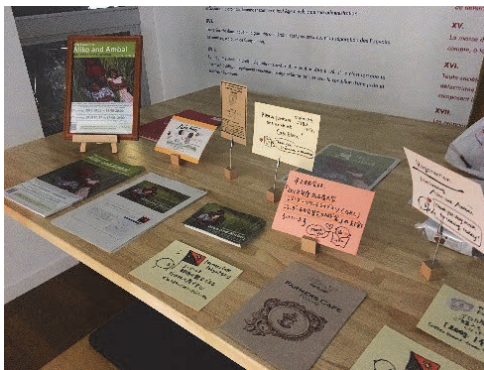
東京都千代田スポーツセンター 映写ルーム

本上映会および研究会では、パプアニューギニアの山岳地帯であるゴロカ（Goroka）を舞台にした日本未上陸作品「Aliko and Ambai」を通じて、メラネシア地域に深く根付くジェンダー問題について理解することを目的とし、名古屋および東京にて、合計4回の上映とディスカッションの機会をもった。

名古屋での2度の開催時には、上映後に Mark Eby 監督および共同制作者である Diane Anton 氏とともに、映画製作の舞台裏と描かれているジェンダー問題について、参加者を交えてのディスカッションを行った（パプアニューギニア・米国・日本の3か国で Skype 接続）。東京での開催時には、企画責任者である高橋麻奈がパプアニューギニアのジェンダー問題の現状と人権についてのプレゼンテーションを行い、ディスカッションの時間を設けた。参加者にはアンケートを実施し、パプアニューギニアの現状や映画の内容についての感想や意見を集めた。これらの内容を集計したものは、

Mark Eby 監督、Diane Anton 氏を含む制作チームと共有し、上映会実施ごとに意見交換を行いながら、運営方法について相談・調整していった。アンケートの回答内容および参加者からのフィードバックや当日のディスカッションから、パプアニューギニアの現状について初めて知ったという声だけではなく、ジェンダー問題や開発援助に関する根本的な問題についての様々な示唆があったという感想もあり、また会場でのQ&A セッションでも多くの意見が挙げたことから、本上映会・研究集会が目指していた、「メラネシア地域の文化および社会についてだけでなく、ジェンダー役割および伝統的社会における女性の社会的地位の低さなど、ジェンダーを取り巻く国際的な問題について学び、考える機会を提供すること」という目標は達成できたと考えている。「Aliko and Ambai」制作チームも、日本におけるフィードバック内容には非常に感銘を受けており、「日本での反響の大きさや、他の国との感想や視点の違いに驚いている」との意見をいただいた。今後、これらのフィードバック内容などをどう生かしていくかについて、引き続き制作チームと検討していく予定である。

なお、本上映会は、JICA 中部、Farmers Café Tokyo に後援、日本オセアニア学会、在日本パプアニューギニア大使館に広報などのご協力をいただいた。



会場での配布資料など



東京での上映会場の様子

◆ 「大学におけるセクハラ・性暴力について」

森 桃（名古屋大学文学部2年）

日時：2018年10月21日（日）10：00～17：00

会場：名古屋大学アジア法交流館 ACフォーラム

ワークショップは午前・午後の2部構成で行われた。午前の部では、広島大学の北仲千里氏に「性的同意」とその意思表示の重要性、さらに大学で起きうる多様な形態のハラスメントについての講演をしていただいた。講演では、大学内におけるハラスメントの特徴と判断基準、および被害に遭った場合に

どのように行動すればよいか、また大学側はどう対処すべきかについてのお話があった。質疑応答の際には、広島大学ハラスメント相談室の活動内容や相談への対応方法についてもご紹介いただいた。広島大学ハラスメント相談室が多言語でのカウンセリングを提供しており、学生の多様なニーズに柔軟に対応する活動をしているという点は興味深く、名古屋大学のハラスメント相談センターが参考にできる点も多いと思った。また、北仲先生ご自身が名古屋大学の学生だった頃にハラスメント相談の組織を立ち上げた経験談は、とても印象深かった。総じて、大変有意義な講演内容であった。



北仲先生を囲んで



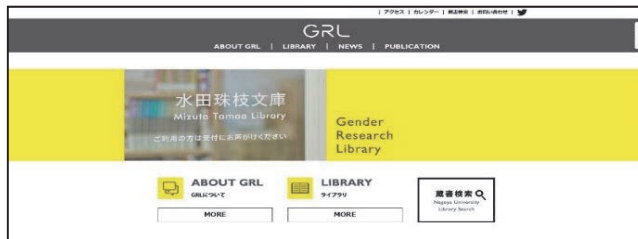
護身術ワークショップの様子

ワークショップ後半は、名古屋市内で護身術レッスンを行っているメキシコ人講師アルベルト・レペ先生による護身術ワークショップを行った。ワークショップでは、街中や自宅など様々な状況において危険が及んだ時に、自分自身を守るためのテクニックについて、実践を通じて学んだ。講師が「最も重要なのは、公共的な場にいる時に、常に警戒心を抱くことで、どこにいても、常に自分のパーソナルスペースを保ちつつ、広くて開放的な視野を持つことが重要」であると言っていたことは印象的であった。またこのようなテクニックは、女性だけではなく男性にも役立つ技術であると気づくことができた。

広報

◆ ホームページ

GRL 開館準備中の 2017 年 9 月に開設。GRL の創設目的、活動報告、施設案内、スタッフ紹介、図書館の利用方法のほか、新着情報と出版物の紹介、各種催しの案内を掲載している。<http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>



◆ 年報『GRL Studies』

年 1 回発行。ジェンダーをテーマにした特集の他に、GRL の活動報告、助成事業報告、助成金募集要項等を掲載している。

◆ ニュースレター

年 2 回発行（2018 年 1 月に第 1 号、同年 7 月第 2 号、2019 年 1 月第 3 号を既発行）。GRL の新着情報や主催企画の報告、名古屋大学の教員・学生によるエッセイ、各種関連情報の案内を掲載している。GRL ホームページでも公開中。



ニュースレター

◆ リーフレット

GRL の基本情報・案内を掲載。日本語版および英語版がある。また、開館記念として関係者、日本国内外のジェンダー研究者からのメッセージが寄せられたパンフレットも発行。



パンフレットとリーフレット

研究員エッセイ

ごちゃごちゃしてみる

—GRL 研究員として勤務した雑感—

西山真司（GRL 研究員）

私がGRLの初代研究員として勤務したのは2017年6月から2019年3月までの期間であり、これはGRLの建物が完成してその後本格的に始動した時期にあたる。このエッセイでは、私がGRLでの勤務を通じて感じたことを雑駁に書いていくことにしたい。

◆小さな専門図書室の面白さ

GRLはジェンダーに特化した小さな図書室であり、入り口に立っただけで図書室の全体を見渡すことができる。図書は和書も洋書も区別なく配架され、外国語の原著の横に邦訳書が並んでいたりする。ひょっとしたら初めてGRLを訪れる人は、その小ささに少しがっかりするところがあるのではないかという気もする。だが、私はこの小ささこそがGRLのとても良い特徴だと思っている。

もちろん、名古屋大学には120万冊を超える図書やさまざまな資料を所蔵する大きな中央図書館があり、そこと比べるとGRL図書室はいかにも頼りない。けれども、ジェンダーという領域横断的な分野の図서가、和洋取り混ぜて一室に集められているというのは意義のあることである。たとえば労働とジェンダーの問題に関心があって図書室を訪れた利用者の目にも、政治とジェンダーを取り扱った本が飛び込んでくる。LGBTの権利について調べようと思った学生が、その横に並ぶかつてのフェミニズム闘争の本を手にとってみる。こうした出会いが起きるのは、小さな図書室ならではの醍醐味だ。今では、おすすめの図書には院生スタッフの手書きPOPがつけられているし、また私が書いた図書の紹介文も随所に展示されていた。こうした取り組み自体、流行りの本屋のような手法ではあるが、ジェンダーという一つの学問分野に収まりきらないトピックの広がりを感じてもらうにはうってつけである。個人的には、GRL図書室はもっと雑多で“ごちゃごちゃ”していても良いのではないかとすら思っている。図書に限らず、ジェンダーに関するさまざまなメディアやモノを展示して、ジェンダーやセクシュアリティといったものが私たちの生活や意識のさまざまなところに伏在しているということを視覚的に表現してみるのも手だろう。それは、大きな総合図書館では実現できない贅沢であるはずだ。

◆ジェンダーに関心のない人に向けて

私が GRL での仕事を通じて意識していたのは、ジェンダーに関心がないという人（主として学部 1 年生）に、どうしたらジェンダーに関心を持ってもらえるか、ということであった。たとえ現時点で「ジェンダー」という言葉にピンと来なくても、数年後や（場合によっては）数十年後に「ああ、今自分（たち）がぶつかっているのはジェンダーの問題なのだ」と気づいてもらえること、そして卒業してからもう一度 GRL で本を借りて読んでみようかなと思ってもらえること、そうなるにはどうしたら良いだろうかということを考えてきた。残念ながら、何かの結論を得たわけでも、そのための具体的かつ効果的な取り組みができたわけでもないのだが、大学内に設置されたジェンダーについての専門図書室として、ジェンダーに関心のない人を引き込むことは一種の義務であるとさえ思っていた。

そのためには、蔵書や設備の充実した中央図書館ではなく、あえて GRL を訪れてもらえるだけの理由が必要になる。上述のような、ごちゃごちゃした図書室にするというのはその方策のうちの一つになるだろう。あるいは、圧巻の水田珠枝文庫や、そこに所蔵されている稀覯本の類を見て「へえー」と思ってもらえるだけでも良いのかもしれない。場合によっては「あそこに行けば、ジェンダーについてのレポート課題をこなせる」という実利的(?)な理由でもいい。とにかくジェンダーについて関心のない人が、足を踏み入れたくなるような図書室になることが、開室 2 年目を迎える GRL の今後の課題になってくるように思われる。

◆いろいろな人がいろいろに関わる

ジェンダー専門の図書室を核にするが、同時に研究施設でもある——これは GRL のユニークな特徴である。だからこそ、GRL では諸種のセミナーやシンポジウムを開催してきた。GRL は、そういう名称の建造物であるとともに、ジェンダー研究のネットワーク拠点であることを目指している。

ところで、現実には「建物がある」というのは実に重要なことである。なにを当たり前のことを、と思われるかもしれない。だが、もし GRL に物理的な実在性がなかったとしたら、いくらジェンダー研究のネットワーク拠点を謳ったところで、実際にそこにジェンダー研究者が集まる保証はない。現在ではインターネットなどを利用して仮想的な研究拠点を作ることも可能だし、ウェブカメラがあればテレビ会議だって難なくこなせる時代ではある。しかし、GRL という建物があるからこそ、そこで何かをしてみようというきっかけが生まれるのもまたたしかである。

私が着任していた期間に GRL でおこなわれたセミナー等は、かなり手探りなところが

あった。しかし、それによってはじめて見えてきた展望や反省点もある。おそらく今後も GRL ではさまざまなセミナー、シンポジウム、読書会...等々がおこなわれていくのであろうし、またおこなわれていくべきである。そうした中で、少ない GRL の運営スタッフのみにてセミナー等の企画立案・実施をしていくことには限度がある。テーマや人選が偏ったり、広がり生まれなかったりもするだろう。だからこそ、いろいろな人がいろいろに関わって研究を作っていく“場”として、GRL が持つ役割は大きい。

名古屋大学およびその近隣には、多くの研究者や院生・学部生等々がいる。そうしたいろいろな人が、いろいろに出入りしたり自由に企画を持ち寄ったりする場であること、そして、そこで新たな研究のネットワークが広がること、これらは現実に建物を持つ GRL だからこそ果たせる価値ではないかと考えている。もちろんそれによって失敗することもあるかもしれないが、いろいろな人が集まるごちゃごちゃした施設であることの可能性に賭けてみてもいいのではないかと私は思う。

◆ジェンダーを研究すること

最後に、私自身とジェンダー研究の話をしたい。私の専門分野は政治学で、GRL に勤務するまでは、（ジェンダーに関心を持ちつつも）ジェンダー研究をしていたわけではなかった。それが GRL に研究員として勤務したことをきっかけとして、職務上、あるいは自分の関心から、さまざまなジェンダー研究に触れる機会があった。これは僥倖であったと思っている。自分のフィールドである政治学のみならず、他分野でジェンダーというものがどのように問題化されているのかを知るきっかけになったからだ。こうして研究員として勤務していた 2 年弱の間に、ジェンダー研究についてのおぼろげな見取り図のようなものが出来、そのなかで自分の専門分野においてジェンダーをどう取り入れることができるのかについてのイメージがついてきた。研究者としてあるトピックを研究する際には、そのトピックに直接関連する専門書を集中的に渉猟するのが一般的であるが、広く浅く雑多に勉強してみることで、あまり関連付けられないことのない要素をつながけながら問題を考えることができるようになったと思う。今後、それを研究の成果として発表していくことが私の課題となる。

私自身、研究員として在任中に GRL の発展に寄与できたかどうか、どうにもおぼつかない。そんななかで提言めいたことなどおこがましいとは思っているのだが、オープンして軌道に乗った今、GRL の未来はスマートかつ高邁であることよりも、“ごちゃごちゃ”としていくことの方にあるのではないかと私は思っている。今後の GRL のさらなる発展を期して――。

GRL 蔵書紹介

GRL では公式 twitter を開設し、蔵書の一部を紹介している(担当 西山真司研究員)。以下にその一例として、「いいね」が多かった図書 6 点の紹介 tweet を転載する(発行年順)。

Mary Evans ed. *Feminism Critical Concepts in Literary and Cultural Studies*. Vol. I ~IV Routledge, 2001

20世紀後半の主要なフェミニズム論文を、ポーボワールからバトラーやフレイザーなどまで、総計約90本集めた4巻の論文集です。便利な出版年・初出一覧表付き。第一巻の冒頭には、近代とフェミニズムについて多角的に論じた「はじめに」が付されていて、ここを読むと各年代の論文がどのような時代背景に結び付いていたのかが理解できるようになっています。フェミニズムについて本格的に勉強するのであれば、この本を手にとってみると良いでしょう。こうした本はなかなか個人で購入するものではないと思いますので、ぜひGRLでお手にとりいただければと思います。名古屋大学ではGRLだけが所蔵しています。

川島慶子『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエー18世紀フランスのジェンダーと科学』(東京大学出版会、2005年)

17世紀の科学が「神への奉仕」であり、19世紀の科学が職業科学者によって遂行される現在の科学の原型であったとすれば、18世紀はその転換が起きた時期でした。本書のテーマは、現在の「科学」の原型が形成された18世紀を生きた二人の貴族階級に属する才女の生涯を通じて、女性と科学との関係を読み解くというものです。デュ・シャトレ夫人もラヴワジエ夫人も、科学に対する類まれな情熱と才能をもちながら、これまでの科学史においては適切な評価を受けてきませんでした。それは、そもそも当時から(そして現在でも)科学というのは男の世界であるべきであり、いかに才気あふれる女性であろうとも、科学の世界には「男性の補助者」「観客」としてしか関われないという規範が存在してきたからだ、と本書は述べます。「彼女がかつて賞賛されたのは、『科学や語学、絵画などに長けていた』からというより、これらの才能をもっぱら『身近な男を支えること』に生かしていたからにほかならない。女が自分自身の野心を自覚して、そのために自分の能力を使いたいということが外に対して明らかになると、すでにデュ・シャトレ夫人の章で見てきたように、その女性に対する社会の評価は厳しくなるのだ」(p.226)。

女性は科学教育を受けられず、またアカデミーの会員にもなれないなかで、科学を志す女性が科学の世界に触れる可能性は、サロンを開き、そこで当時の男性フィロゾフたちと接触することを通じて以外にありませんでした。しかし、それによって彼女たちは、やはり「男性の良き補助者」か、そうでなければ「恋多きふしだらな女」のイメージを割り当てられてしまいます。こうした女性と科学をめぐる当時の状況を、二人の女性の生涯を通じて示すのが本書です。

ダグマー・ヘルツォーク(川越修・田野大輔・荻野美穂訳)『セックスとナチズムの記憶—20世紀ドイツにおける性の政治化』(岩波書店、2012年)

本書は、ナチスから冷戦期までを中心にドイツの性政策の歴史を辿り、そこでどのような言説や記憶が構築されていったのかを探索します。「ナチズムと性」については、二つの正反対の解釈が流布していました。一方で戦後直後のキリスト教的な保守層は、ナチズムを徹底して性的に不道徳で淫乱なものとして描き、そして性的純潔への回帰を説きました。他方で抑圧された性の解放を掲げていた1968年前後のニューレフト運動は、ナチズムが市民の性的自由を制約した元凶だと主張しました(そして戦後の歴史研究もこうした言説を鵜呑みにしていました)。果たしてナチスは性に対して開放的であったのか抑圧的であったのか、こんな謎が残ります。本書は、そもそもなぜこうした相矛盾する二つの言説が生み出されたのかを出発点に、ナチズムの成立と拡大、そして戦後におけるその清算において、いかにセクシュアリティが鍵を握っていたかを論じていきます。ドイツ史に関心のある方だけでなく、フーコーが好きな方にもおすすめです!

小杉礼子・宮本みち子編著『下層化する女性たち—労働と家庭からの排除と貧困』（勁草書房、2015年）

若者の貧困問題——この言葉を聞いたときに、つい頭に浮かぶのはフリーターであったりニートであったり、いずれにしても若年“男性”の貧困ではないでしょうか。しかし、現実には日本において（特に若年層の）女性の貧困問題が進行しています。この論文集では、そもそもなぜ女性の貧困が「見えていたのに社会問題化されなかったか」を軸にして、女性の貧困の実態・個別事例・問題への取り組みを解き明かしていきます。若年女性の貧困は、結婚であれ実家であれ「家庭」への包摂によって解消される一時的状態と考えられていましたが、実際には虐待や未婚・離婚など「家庭」からの排除が起きており、その一方で「労働」においては低賃金で不安定な職にしか用意されていない、といった構造が描かれます。これを女性による「個人的なライフスタイルの選択」の問題に解消することなく、社会構造の問題として対処していくことが求められている、と本書は提言しています。

全体を通して基本線がはっきりしており、しかし著者ごとの視点がユニークであるという、論文集としては理想的な本です。

関めぐみ『＜女子マネ＞のエスノグラフィー—大学運動部における男同士の絆と性差別』（晃洋書房、2018年）

日本およびカナダの大学アメフト部における参与観察にもとづくエスノグラフィーを通じて、日本の「女子マネ」の置かれた地位をあきらかにするものです。現在でも大学や高校などの部活動における女性蔑視（ミソジニー）や、そうした女性蔑視と異性愛主義により成り立つホモソーシャルな空間について、さまざまな議論が投げかけられています。ただし本書は「女子マネ制度は女性差別の原因であり即刻やめるべきである」と主張するものではなく、いかにしたら女子マネおよび選手がハラスメントの構造に陥ることなく活動できるかについて、特にカナダの事例を参照しながら論じるものです。その一つの鍵がマネージャーの専門性を高めることで、女子マネを下働きとしてではなく、専門スタッフとして位置づけるべきとされます。本書の大部分は、筆者自身が長期間参与観察することによって得られた発見を報告するもので、それはそれで興味をそそられますが、それと同時に大学の部活を一種の組織として位置づけ、そこにホモソーシャル概念や権力概念も適用するといった、理論的考察も行われます。「女子マネ制度自体が女性蔑視の象徴」vs「個人の選択に外部が口を出すべきではない」という女子マネ論争に、一石を投じる著作です。

サラ・S・リチャードソン（渡部麻衣子訳）『性そのもの—ヒトゲノムの中の男性と女性の探求』（法政大学出版局、2018年）

「ヒトの性差はXとYという“性染色体”によって、そしてそれのみによって、決定される」——広く信じられているこうした科学的言説がどのように作られてきたかを、本書は科学史として記述していきます。現在の生物学では、性染色体は性を決定するメカニズムのひとつに過ぎないことが知られていますが、かつては女性と男性は根本的に異質なものだというある種のジェンダー意識が、XとYという染色体の性質を歴史的に歪めてきました。本書は、科学プログラムがどのようにして「性」を実践的に捉えてきたかを、ジェンダー科学論として（同時に科学実践のエスノメソドロジーとしても？）捉えていきます。筆者のこうした研究は、ジェンダーに敏感であることは科学の発展に寄与する、というスタンスにもとづいています。

関連資料

所蔵資料

■図書

水田珠枝文庫

水田珠枝文庫には、水田珠枝氏(名古屋経済大学名誉教授)による寄贈書を中心とした約7,200冊の貴重な書籍が収められています。ここには女性史や政治思想・社会思想に関連したものをはじめ、広くフェミニズムやジェンダーを考えるための書籍が、和書と洋書ほぼ同数取り揃えられています。水田珠枝文庫の中には書籍を読むことができる座席も用意されていますので、落ち着いた読書・研究に取り組むことができます。

女性・フェミニズム・ジェンダー研究関連図書

ジェンダー研究に必要な幅広い分野の女性・フェミニズム・ジェンダー問題に関する図書、女性を取り巻く歴史・社会・理論などに関する図書(和書・洋書)を収集・提供しています。

明治期女性教育書コレクション

日本文学研究者(榊原千鶴)が蒐集した明治期を主とする和装本の女訓書(女性が日常生活を送る上での心構えや教訓、啓蒙の知識を記した女性向け教訓書)、読本、修身書等約150点からなるコレクションです。



水田珠枝文庫の入口



水田珠枝文庫 洋図書



図書室

所蔵資料

■アーカイブ

名古屋市の共同保育所関連資料

東海ジェンダー研究所編『資料集名古屋における共同保育所運動：1960年代～70年代を中心に』（日本評論社、2016年）のために蒐集された、ほぼ50年間にわたる共同保育所運動の資料（ガリ版ずりのピラや報告集、手書きの保育実践記録など）を整理したものです。

アメリカ女性史関連資料

アメリカの女性参政権運動を中心にした女性運動にかかわる定期刊行物資料。
The Lily (1849-1856), *The Revolution* (1868-1871), *Lucifer, the Light-Bearer* (1885-1906), *The Club Woman* (1897-1904), *Mother Earth* (1906-1918), *The Socialist Woman* (1907-1910), *The Progressive Women* (1909-1910), *The Woman's Protest* (1912-1918)など。Greenwood Press のマイクロフィルム版からプリントアウトされたものです。

イギリス性差別禁止・雇用平等関係資料

イギリス女性労働問題研究家（高島道枝）が蒐集したイギリスの「雇用平等法」（1970年）や「性差別禁止法」（1975年）の運用問題についての資料。ACAS（労使紛争調停・仲裁・勧告機関）、EOC（平等機会委員会）の年次報告書、イギリス政府関係文書、各種政策研究所のレポートなど、1970年代から1990年代末ごろまでのものが集められています。

男女雇用機会均等法関連資料

1985年成立の「男女雇用機会均等法」に関して、主として1997年改正、1999年改正、2001年改正までの国会の立法過程における討議資料、国会審議録及び育児介護休業法等に関する資料です。

労働省・厚生労働省発表資料（女性関連・雇用関連資料を除く）

1996年～2004年に労働省・厚生労働省が報道機関等に発表した資料のうち、女性関連・雇用関連資料を除いた資料です。
女性関連・雇用関連の同省発表資料は、「男女雇用機会均等法関連資料」のファイルにあります。

国際婦人年あいちの会資料

1975年国際婦人年の世界の女性たちの活動に呼応して、名古屋の女性5人が発起人となり「国際婦人年あいちの会」（1995-1998）を立ち上げました。発起人の一人である大脇雅子弁護士から寄贈された「国際婦人年あいちの会」の行動計画、活動記録、ニュース、関連資料を中心とした資料です。
1979年発足の「労基法改悪反対！男女雇用平等法を成立させる愛知の会」の資料も含まれます。

ワーキング・ウーマン資料

1986年4月に発足の「ワーキング・ウーマン（男女差別をなくす愛知連絡会）」（略称WW）の発行したWWニュース 76号～178号と20周年記念号（WWニュース 123号）・30周年記念誌（2016年3月閉会）の資料です。
ワーキング・ウーマンの前身は、1979年発足の「労基法改悪反対！男女雇用平等法を成立させる愛知の会」で1986年に現称に変更しています。

図書室の統計

統計期間 2017/11/1-2019/3/31

資 料	図書 蔵書数	合計	和書	洋書
		21,618	14,485	7,133
	(内 水田珠枝文庫)	7,668	3,474	4,194
	雑誌 受入種類数	合計	和雑誌	洋雑誌
		161	128	33

※図書の蔵書数で「東海ジェンダー研究所」寄贈分

図書	合計	和書	洋書
	21,073	14,048	7,025

利用状況	入室利用	開室日数	343日		
		入室者数	合計	学内者	学外者
			7,588	6,618	970
	貸出利用	貸出冊数	2,537	1,923	614
	学外者利用証発行		94名		

※ 開室時間：火・水・木・土 10:00～17:00／金 10:00～20:00
 休室日：日曜・月曜・休日・年末年始(12月28日～1月4日)

相互利用(ILL)	受付件数	65	文献複写	現物貸借
			25	40

施設・設備	GRL建物面積	840m ²
	図書室 閲覧座席数	24席
	検索用PC	1台



図書室

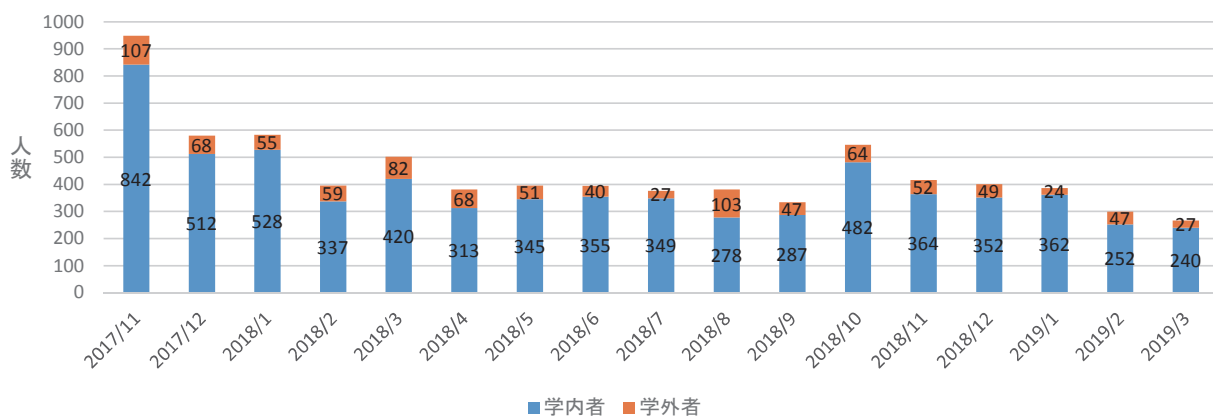


閲覧室

閲覧統計

	2017/ 11	2017/ 12	2018/ 1	2018/ 2	2018/ 3	2018/ 4	2018/ 5	2018/ 6	2018/ 7	2018/ 8	2018/ 9	2018/ 10	2018/ 11	2018/ 12	2019/ 1	2019/ 2	2019/ 3	合計
来室者数	949	580	583	396	502	381	396	395	376	381	334	546	416	401	386	299	267	7588 名
学内者	842	512	528	337	420	313	345	355	349	278	287	482	364	352	362	252	240	6618 名
学外者	107	68	55	59	82	68	51	40	27	103	47	64	52	49	24	47	27	970 名
(内訳)																		
一般市民	63	42	36	35	51	39	22	25	15	21	20	50	18	17	10	25	18	507 名
学生	29	16	13	9	11	9	18	7	7	71	12	8	10	24	2	5	4	255 名
研究・教育関係者	15	10	6	15	20	20	11	8	5	11	15	6	24	8	12	17	5	208 名

来室者数



※2018/8月の学外者103名の中に8/8-10のオープンキャンパスで来室の高校生・保護者等73名を含む。

貸出統計

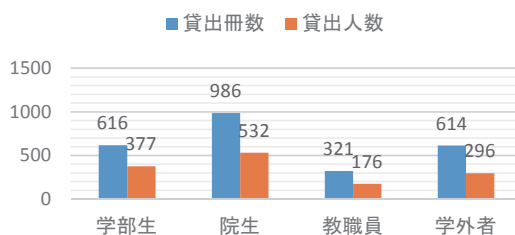
1. 分類別内訳

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	貸出
	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	言語	文学	冊数
和図書	19	75	148	1486	53	22	2	49	14	496	2364
洋図書	0	1	5	139	5	1	0	6	0	16	173
合計	19	76	153	1625	58	23	2	55	14	512	2537

2. 利用者別内訳

	学部生	院生	教職員	学外者	合計
貸出冊数	616	986	321	614	2537
貸出人数	377	532	176	296	1381

利用者別貸出状況



GRLレクチャールーム・小会議室利用記録

GRL関連

開催日	テーマ	講演者	主催・共催・協賛	参加者数
2017.10.31	GRL開館記念式典		主催：GRL 共催：東海ジェンダー研究所	80名
11.30	ジェンダーと名古屋大学		主催：日本学術会議中部地区会議 協賛：GRL	10名
2018.1.27	対話と議論をめざす女性図書館	青木玲子 (国立女性教育会館)	主催：東海ジェンダー研究所 協賛：GRL	60名
3.24	GRL開館記念講演会 「女性史の過去と未来」	ナンシー・F・コット (ハーバード大学)	主催：GRL 共催：東海ジェンダー研究所	90名
3.27	ナンシー・コット教授連続セミナー 第1回「図書館とジェンダー」	ナンシー・F・コット (ハーバード大学)	主催：GRL 共催：東海ジェンダー研究所	27名
3.29	ナンシー・コット教授連続セミナー 第2回「結婚と家族制度」	ナンシー・F・コット (ハーバード大学)	主催：GRL 共催：東海ジェンダー研究所	45名
4.4	ナンシー・コット教授連続セミナー 第3回「セクシュアリティとジェンダー」	ナンシー・F・コット (ハーバード大学)	主催：GRL 共催：東海ジェンダー研究所	37名
7.20	LGBTとセクシュアリティからジェンダーを考える 第1回「ジェンダー／セクシュアリティ研究の古くて新しい課題たち——生物学、性教育、LGBTをめぐって」	加藤秀一 (明治学院大学)	主催：GRL	31名
9.14	フェミニズム基礎理論講座 第1回「フェミニズムの生誕—18世紀」	水田珠枝 (名古屋経済大学 名誉教授)	主催：GRL	44名
9.29	LGBTとセクシュアリティからジェンダーを考える 第2回「寛容の罠——なぜ府中青年の家裁判はゲイ（メディア）から批判されたのか」	風間孝 (中京大学)	主催：GRL	23名
10.12	フェミニズム基礎理論講座 第2回「フェミニズムの論争—19世紀、功利主義とマルクス主義を中心に」	水田珠枝 (名古屋経済大学 名誉教授)	主催：GRL	41名
11.9	フェミニズム基礎理論講座 第3回「生産と再生産の再構成—20～21世紀、個人・家族・社会および国家」	水田珠枝 (名古屋経済大学 名誉教授)	主催：GRL	50名
11.16	LGBTとセクシュアリティからジェンダーを考える 第3回「セクシュアルマイノリティの社会運動——なぜ連帯は難しいのか」	森山 至貴 (早稲田大学)	主催：GRL	21名
2019.1.11	GRL開館一周年記念シンポジウム 「ジェンダー研究機関の過去・現在・未来」	伊田久美子 (大阪府立大学) 石井クンツ昌子 (お茶の水女子大学) 高松香奈 (国際基督教大学) 松岡悦子 (奈良女子大学)	主催：GRL	35名
2.9	LGBTとセクシュアリティからジェンダーを考える 第4回「マイノリティの情報保障——性的少数者を例として」	小澤かおる (首都大学東京)	主催：GRL	17名

名古屋大学男女共同参画センター

開催日	テーマ	主催・共催・協賛	参加者数
2018.8.1	文部科学省科学技術人材育成費補助事業 「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」 「女性研究者リーダーシップ・プログラム」第1回	主催：男女共同参画センター	15名
9.12	文部科学省科学技術人材育成費補助事業 「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」 「女性研究者リーダーシップ・プログラム」第3回	主催：男女共同参画センター	12名
10.15	文部科学省科学技術人材育成費補助事業 「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」 「英語プレゼンテーション・会話研修（初級～初中級者対象）」	主催：男女共同参画センター	7名
11.2	文部科学省科学技術人材育成費補助事業 「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」 「女性研究者リーダーシップ・プログラム」第5回	主催：男女共同参画センター	10名
11.13	文部科学省科学技術人材育成費補助事業 「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」 「女性研究者リーダーシップ・プログラム」第6回	主催：男女共同参画センター	13名
2019.1.7	文部科学省科学技術人材育成費補助事業 「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」 「英語論文執筆（ライティング）研修（初級～初中級者対象）」	主催：男女共同参画センター	8名
2.5	文部科学省科学技術人材育成費補助事業 「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」 「女性研究者リーダーシップ・プログラム」第7回	主催：男女共同参画センター	9名
2.21	HeForShe映画上映会『女を修理する男』	主催：男女共同参画センター	28名
2.22	文部科学省科学技術人材育成費補助事業 「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」 「女性研究者リーダーシップ・プログラム」第8回	主催：男女共同参画センター	9名

その他

開催日	テーマ	講演者	主催・共催・協賛	参加者数
2018. 1.20～21	1930年前後の文化生産とジェンダー	飯田祐子 (名古屋大学) ほか	主催：名古屋大学人文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター	30名
6.2	人文・社会科学系学協会 男女共同参画推進連絡会 (GEAHSS) 第2回アウトリーチ会合		主催：人文・社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会	15名
10.20	「サバイバルとしての女性学」研究会		主催：日本女性学会研究会	5名
10.27	映画「Aliko and Ambai (アリコとアンバイ)」日本上映会—映画「Aliko and Ambai」から考える伝統的社会とジェンダー		主催：高橋麻奈 (名古屋大学男女共同参画センター)	20名
11.10	未就学児を育てるカップルのワーク・ライフ・バランス研究における研修会 (第1回)		主催：TWINStudyIII 研究チーム	50名
11.17	大学女性協会愛知支部 11月例会 美子皇后にみる日本の近代化—明治期女性教育書を手がかりとして—	榊原千鶴 (名古屋大学)	主催：大学女性協会 愛知支部	10名
12.1	未就学児を育てるカップルのワーク・ライフ・バランス研究における研修会 (第2回)		主催：TWINStudyIII 研究チーム	50名
12.7	「2.5次元」とジェンダー	筒井晴香 (東京大学)	主催：Gender Reseach Salon	30名
12.15	未就学児を育てるカップルのワーク・ライフ・バランス研究における研修会 (第3回)		主催：TWINStudyIII 研究チーム	50名
12.22	未就学児を育てるカップルのワーク・ライフ・バランス研究における研修会 (第4回)		主催：TWINStudyIII 研究チーム	50名
2019.3.8	国際シンポジウム ＜帝国＞日本をめぐる少女文化	星野幸代 (名古屋大学) ほか	主催：名古屋大学「建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダ—戦時からの継承と展開」研究グループ	50名
3.20	「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラム修了式		主催：名古屋大学「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラム	30名

GRL関連記事

掲載年月日	取材者	タイトル
2017.2.27	中日新聞（朝刊）	「名大にジェンダー図書館」
2.27	東京新聞（夕刊）	「ジェンダー図書館開設へ」
3.4	中日新聞（朝刊）	「名古屋大、ジェンダーをテーマに図書館 10月末に開設」
3.4	読売新聞（朝刊）	「ジェンダー研究名大に拠点」
3.13	毎日新聞（夕刊）	「名大にジェンダー研究拠点 10月開設」
9.25	朝日新聞（朝刊）	「きっとベアテに怒られる」
10.17	毎日新聞（夕刊）	「オールジェンダートイレ：多様な性に配慮 名大の研究施設に登場」
10.17	西日本新聞	「名大に『ジェンダー図書館』来月開館」
11.1	朝日新聞（朝刊）	「ジェンダー 考える拠点」
11.1	読売新聞（朝刊）	「ジェンダー問題図書館オープン」
11.2	毎日新聞（朝刊）	「ジェンダー研究拠点完成」
11.7	中日新聞（朝刊）	「名大の専門図書館オープン」
2018.1.26	シティリビング (サンケイリビング新聞社)	「ジェンダー研究を深化させ、知の拠点に」
1.11	日経アーキテクチャ	「オールジェンダー『ユニバーサル』の先へ」
4.6	中日新聞（夕刊）	「『女性図書館』発展を期待」

執筆依頼記事

刊行年月日	発表媒体	タイトル
2017.4.17	『名大トピックス』No.287	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ調印式を挙
5.1	『建築ジャーナル』No.1266	ジェンダーを考える起点としての図書館 名古屋大学で建設が進む ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
9.2	『キタン新聞』2019.9.20	ジェンダー・リサーチ・ライブラリについて
9.25	『現代女性文化研究所ニュース』 第47号	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL)
11.1	『共同参画』No.106	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL)
11.1	『名古屋大学国語国文学会会報』 第37号	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
11.28	『新聞協会報』第4268号 「磁気テープ」	ジェンダー研究
12.15	『名大トピックス』No.295	公益財団法人東海ジェンダー研究所への感謝状贈呈式を挙 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ開館記念式典を挙
2018.2.8	『国立国会図書館カレントアウェ アネス-E』No.341	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL) 開館
2.15	『名大トピックス』No.297	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL)
3.2	『愛知図書館協会会報』第195号	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
12.28	『東海地区大学図書館協議会誌』 第63号	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
2019.2.20	『図書館雑誌』第113巻第2号	名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL)

付録

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ規程

(平成 29 年 7 月 18 日規程第 37 号)

改正 平成 29 年 8 月 16 日規程第 50 号

(設置)

第 1 条 名古屋大学(以下「本学」という。))に、国内外の関連機関と緊密な連携を図り、男女共同参画社会を実現するためのジェンダー問題に関する研究、教育、研究者の育成並びに男女平等意識の啓発及び普及を行う拠点とするため、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（以下「GRL」という。）を置く。

(管理責任者)

第 2 条 GRL に、管理責任者を置き、総長の指名する理事をもって充てる。

2 管理責任者は、GRL の管理及び運営に関する業務を掌理する。

(研究室等)

第 3 条 第 1 条に掲げる研究等を行うため、GRL に研究室、セミナー室その他必要な施設（以下「研究室等」という。）を置く。

[第 1 条]

(設備等)

第 4 条 研究室等に、使用者が共同で利用できる設備（以下「共同設備」という。）を置くことができる。

(使用資格等)

第 5 条 研究室等及び共同設備（以下「研究室・設備」という。）の使用を申請できる者（以下「使用代表者」という。）は、次に掲げる者とする。

一 第 1 条に掲げる研究等を行う本学の大学教員

[第 1 条]

二 その他管理責任者が特に認めた者

(使用の許可)

第 6 条 研究室・設備の使用を希望する使用代表者は、別に定める様式により、管理責任者に申し出て、その許可を受けなければならない。

(使用者の責務)

第 7 条 前条の許可を受けた者(以下「使用責任者」という。))は、別に定める使用許可の条件を遵守するとともに、業務の安全確保に努めなければならない。

(使用の許可内容の変更)

第 8 条 使用責任者は、第 6 条の規定により使用の許可を受けた内容を変更する必要がある場合は、別に定める様式により管理責任者に申し出て、その許可を受けなければならない。

[第 6 条]

(使用の許可の取消し等)

第 9 条 管理責任者は、使用責任者が使用許可の条件に違反したと認めたとき、又は GRL の管理上支障があると認めたときは、当該使用の許可を取り消し、又は当該使用を中止させることができる。

(使用負担金)

第 10 条 使用責任者は、研究室・設備の使用に係る費用を負担しなければならない。

2 前項の負担金の徴収方法については、別に定める。

(光熱水料)

第 11 条 使用責任者は、研究室・設備において使用した光熱水料を負担しなければならない。

2 前項の光熱水料の徴収方法については、別に定める。

(原状回復)

第 12 条 使用責任者は、研究室・設備の使用が終了したとき、又は第 9 条の規定により管理責任者が使用の許可を取り消し、又は使用を中止させたときは、使用した GRL の施設及び備品等(以下「施設等」という。)を原状に回復しなければならない。

[第 9 条]

(損害賠償)

第 13 条 研究室・設備の使用者は、その責に帰すべき事由により、施設等を滅失、破損又は汚損したときは、その損害を賠償しなければならない。この場合において、損害賠償は、使用責任者の責任により行うものとする。

(運営委員会)

第 14 条 GRL の使用及び運営に関する事項を審議するため、運営委員会を置く。

2 運営委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第 15 条 GRL の管理に関する事務は、総務部職員課において処理する。

(雑則)

第 16 条 この規程に定めるもののほか、GRL の使用に関し必要な事項は、総長が定める。

附 則

この規程は、本学が GRL を所有した日（平成 29 年 8 月 31 日）から施行する。

附 則(平成 29 年 8 月 16 日規程第 50 号)

この規程は、平成 29 年 8 月 31 日から施行する。

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ利用細則

制 定 平成 29 年 7 月 18 日

(趣旨)

第 1 条 この細則は、名古屋大学附属図書館利用規程（平成 16 年度規程第 178 号。）第 18 条の規定に基づき、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（以下「GRL」という。）の利用に関し必要な事項を定めるものとする。

2 GRL は、次の事業を行うことを目的とする。

- 一 ジェンダー問題についての知を長く保存し、ジェンダー研究者等に提供するためライブラリとアーカイブを構築すること。
- 二 ジェンダーに関する制度や実践を研究し、21 世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献すること。
- 三 国内外のジェンダー問題に関する研究、普及及びネットワークの拠点を形成すること。

(図書館資料)

第 2 条 GRL 備え付けの図書及びアーカイブを含む史資料（以下「図書」という。）は、次のとおりとする。

- 一 水田珠枝文庫の図書
- 二 ジェンダー研究に関する図書
- 三 逐次刊行物
- 四 その他史資料

(利用)

第 3 条 GRL は、一般の利用に供するものとする。

2 前項の規定にかかわらず、次に掲げる場合には、図書の一般の利用を制限することができるものとする。

- 一 図書の全部又は一部を一定の期間公にしないことを条件に公文書等の管理に関する法律（平成 21 年法律第 66 号）第 2 条第 7 項第 4 号に規定する法人その他の団体又は個人から寄贈又は寄託を受けている場合における当該期間が経過するまでの間
- 二 図書に独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成 13 年法律第 140 号）第 5 条第 1 号及び第 2 号に掲げる情報が記録されていると認められる場合における当該情報が記載されている部分
- 三 図書の原本を利用させることにより当該原本の破損若しくはその汚損を生じるおそれがある場合又は当該原本が現に使用されている場合

(利用の手続き)

第 4 条 GRL を利用しようとする者（以下「利用者」という。）は、所定の手続きを経なければならない。

(利用時間)

第 5 条 利用時間は、火・水・木・土曜の 10 時から 17 時まで及び金曜の 10 時から 20 時までとする。

2 前項の規定にかかわらず、管理責任者が必要と認めたときは、利用時間を変更することができる。

(休館日)

第 6 条 休館日は、次のとおりとする。

- 一 日曜日
- 二 月曜日
- 三 国民の祝日に関する法律（昭和 23 年法律第 178 号）に規定する休日
- 四 年末年始（12 月 28 日から翌年 1 月 4 日まで）

2 前項の規定にかかわらず、管理責任者が必要と認めたときは、休館し、又は開館することができる。

(閲覧)

第 7 条 利用者は、GRL が管理する図書を閲覧室において閲覧することができる。

2 利用者は、閲覧を終えた図書を所定の場所に戻さなければならない。

3 図書を利用者の閲覧に供するため、目録及び利用に関する規則等を常時閲覧室内に備え付けるものとする。

(貸出)

第 8 条 図書館外貸出を受けることができる者は、第 3 条に定める者とし、貸出は上限 5 冊まで、貸出期間は原則 2 週間以内とする。

2 貸出を受けようとする者は、利用証を作成しなければならない。（別記参照）

3 利用者は、貸出を受けた図書を他人に転貸してはならない。

4 利用者は、GRL で貸出を受けた図書を日本国外に持ち出してはならない。

5 郵送による貸出は行わない。

(返却)

第 9 条 利用者は、貸出を受けた図書を、貸出期間内に返却しなければならない。

2 利用者は、貸出期間中であっても、他から貸出又は閲覧の希望がある場合は、臨時に返却を求められることがある。

3 利用者は、GRL の利用に係る身分又は資格を失ったときには、貸出を受けた図書を直ちに返却しなければならない。

(禁帯出)

第 10 条 次に掲げる図書の貸出は行わない。ただし、管理責任者が必要と認めた場合は、この限りではない。

- 一 水田珠枝文庫の図書

二 その他、管理責任者が指定する図書

(貸出の停止)

第 11 条 管理責任者は、貸出を受けた者が図書の返却を延滞したときは、その者に対して、貸出を停止することができる。

(複写)

第 12 条 利用者は、研究又は教育の用に供することを目的とする場合に限り、法令に違反しない範囲で、文献複写をすることができる。

(参考調査)

第 13 条 利用者は、研究又は教育の参考になる学術文献に関わる調査及び情報の提供を依頼することができる。

(情報検索)

第 14 条 利用者は、GRL が提供する情報検索サービスを利用することができる。

(遵守事項)

第 15 条 利用者は、次の事項を守らなければならない。

- 一 静粛を保ち、他の利用者の迷惑となる行為をしないこと。
- 二 所蔵図書資料、機器又は設備を汚損し又は毀損しないこと。

2 管理責任者は、この細則等又は GRL スタッフの指示に従わない者に対し、利用を制限することができる。

(補則)

第 16 条 この細則の実施に関し必要な事項は、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ運営委員会小委員会及び運営委員会の議を経て、管理責任者が決定する。

附 則

この細則は、平成29年11月1日から施行する。

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ運営委員会内規

制定 平成 29 年 8 月 18 日

(趣旨)

第 1 条 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ規程（平成 29 年度規程第 37 号。以下「規程」という。）第 14 条の規定に基づく名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（以下「GRL」という。）の運営委員会に関する事項は、この内規の定めるところによる。

(審議事項)

第 2 条 運営委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- 一 GRL における管理運営の基本方針に関する事項
- 二 GRL における事業計画、予算及び決算に関する事項
- 三 GRL に関わる職員の人事に関する事項
- 四 ジェンダー問題に関わる研究、教育、普及活動及び国内外の諸機関との連携に関する事項
- 五 その他 GRL に関する重要事項

(組織)

第 3 条 運営委員会は、次に掲げる運営委員をもって組織する。

- 一 規程第 2 条に定める管理責任者（以下「管理責任者」という。）
 - 二 副総長又は副理事のうち、前号の委員が指名した者
 - 三 男女共同参画センター長
 - 四 男女共同参画センター員のうち、男女共同参画センター長が指名した者
 - 五 第 8 条の小委員会の学内委員のうち、運営委員会委員長が指名した者
 - 六 部局の長又は教育研究評議会評議員のうち、総長が指名した者
 - 七 その他名古屋大学の職員で運営委員会が必要と認めた者
- 2 前項第 2 号、第 4 号から第 7 号までの運営委員は、管理責任者が任命する。

(任期)

第 4 条 前条第 2 項の運営委員の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 前項の運営委員に欠員を生じたときは、その都度補充する。この場合における運営委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 運営委員会に、委員長を置き、第 3 条第 1 項第 1 号の運営委員をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。ただし、委員長に事故がある場合は、あらかじめ委員長が指名した運営委員が議長となる。

(定足数)

第6条 運営委員会は、運営委員の過半数の出席により成立し、議事は、出席者の過半数によって決する。

2 前項の規定にかかわらず、人事に関する議事を審議する運営委員会は、運営委員の3分の2以上の出席により成立し、当該議事は、出席者の3分の2以上をもって決する。

(意見の聴取)

第7条 運営委員会が必要と認めたときは、運営委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(小委員会)

第8条 GRLの運営に関する具体的な事項を審議するため、運営委員会の下に小委員会を置く。

(雑則)

第9条 この内規に定めるもののほか、運営委員会に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、管理責任者が定める。

附 則

1 この内規は、平成29年11月1日から施行する。

2 最初に指名される第3条第1項第7号の委員は、同号の規定にかかわらず、管理責任者が指名する。

3 この内規の施行の際最初に任命される運営委員の任期は、第4条第1項の規定にかかわらず、平成30年3月31日までとする。

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ運営委員会小委員会内規

制定 平成 29 年 8 月 18 日

(趣旨)

第 1 条 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ運営委員会内規(平成 29 年度内規第〇号。以下「運営委員会内規」という。)第 8 条の規定に基づく名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ運営委員会小委員会(以下「小委員会」という。)に関する事項は、この内規の定めるところによる。

(審議事項)

第 2 条 小委員会は、運営委員会内規第 2 条に規定する次の審議事項のうち、具体的事項を審議する。

- 一 ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (以下「GRL」という。)における管理運営の基本方針に関する事項
- 二 GRL における事業計画、予算及び決算に関する事項
- 三 GRL に関わる職員の人事に関する事項
- 四 ジェンダー問題に関わる研究、教育、普及活動及び国内外の諸機関との連携に関する事項
- 五 その他 GRL に関する重要事項

(組織)

第 3 条 小委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- 一 男女共同参画センター長
 - 二 男女共同参画センター員のうち、男女共同参画センター長が指名した者
 - 三 公益財団法人東海ジェンダー研究所の役職員のうち、同研究所が指名した者 若干名
 - 四 ジェンダーに関し専門的知識を有する名古屋大学の大学教員のうち、運営委員会委員長が指名した者 若干名
 - 五 その他小委員会が必要と認めた者
- 2 前項第 2 号から第 5 号までの委員は、管理責任者が任命又は委嘱する。

(任期)

第 4 条 前条第 2 項の委員の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 委員に欠員を生じたときは、その都度補充する。この場合における委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 小委員会に、委員長を置き、委員の互選により選出する。

- 2 委員長は、小委員会を招集し、その議長となる。ただし、委員長に事故がある場合は、あらかじめ委員長が指名した委員が議長となる。

(開催)

第6条 小委員会は、原則として、月1回以上開催する。

2 委員長は、3分の1以上の委員が委員会の開催を求める場合その他必要と認める場合は、小委員会を招集しなければならない。

(定足数)

第7条 小委員会は、委員の過半数の出席により成立し、議事は、出席者の過半数によって決する。

(意見の聴取)

第8条 小委員会が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(専門部会)

第9条 小委員会が必要と認めたときは、専門部会を置くことができる。

(庶務)

第10条 小委員会の庶務は、総務部職員課において処理する。

附 則

1 この内規は、平成29年11月1日から施行する。

2 最初に指名される第3条第1項第5号の委員は、同号の規定にかかわらず、管理責任者が指名する。

3 この内規の施行の際最初に任命される委員の任期は、第4条第1項の規定にかかわらず、平成30年3月31日までとする。

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL)
レクチャールーム及び小会議室等使用内規

制 定 平成30年4月27日

(趣旨)

第1条 名古屋大学（以下「本学」という。）のジェンダー・リサーチ・ライブラリ（以下「GRL」という。）におけるレクチャールーム及び小会議室の使用は、ジェンダー研究の発展を本旨とする。その使用に関し必要な事項は、名古屋大学固定資産貸付基準（平成16年度基準第12号）に定めるもののほか、この内規の定めるところによる。

(管理責任者)

第2条 レクチャールーム及び小会議室の運営は、GRLが行う。

- 2 GRLに管理責任者を置き、男女共同参画担当理事をもって充てる。
- 3 管理責任者は、GRLの管理に関する業務を掌理する。

(使用の範囲)

第3条 レクチャールーム及び小会議室等の使用の範囲は、GRLまたは男女共同参画センターが主催及び共催する会合及び行事に使用するもののほか、次の用途に使用することができる。ただし、営利を目的とし、不特定多数の者から入場料又はこれに類するものを徴して行う場合を除く。

- 一 本学又は本学の部局が主催するジェンダーに関わる研究、教育、学術及び文化に関する会合及び行事
- 二 本学の職員等が主催するジェンダーに関わる教育、学術及び文化に関する会合及び行事
- 三 ジェンダーに関わる学会その他の学術団体が主催して行う会合及び行事
- 四 その他、管理責任者が適当と認めたジェンダーに関わる会合及び行事

(使用できない日)

第4条 レクチャールーム及び小会議室等を使用できない日は、次のとおりとする。

- 一 12月29日から翌年1月4日まで
- 二 その他、管理責任者が定める日

(使用時間)

第5条 レクチャールーム及び小会議室等の使用時間は、GRL開館時間（火曜日～木曜日と土曜日の午前10時から午後5時、金曜日の午前10時から午後8時）までとする。

ただし、管理責任者が必要と認めたときは、この限りではない。

(使用の申請)

第6条 レクチャールーム及び小会議室等の使用を希望する者は、事前に別に定める使用申請書を管理責任者に提出し、その許可を得なければならない。

- 2 レクチャールーム及び小会議室等の使用申請は、次の各号の規定するところにより受け付けるものとする。
 - 一 第3条第1号及び2号に該当する会合及び行事の使用申請使用しようとする日の1年前

の日から2ヶ月前まで

- 二 第3条第3号及び第4号に該当する会合及び行事の使用申請使用しようとする日の1年前の日から当該使用しようとする日の2ヶ月前まで

(使用の許可)

第7条 管理責任者は、前条の使用申請があったときは、同一施設に対して同一日時の使用許可が既に与えられていない、及びGRLの運営に支障がない限り、必要な条件を付して、遅滞なく使用の許可を行うものとする。ただし、次の各号に該当する場合は、利用申し込みはできない。

- (1) GRLの設置目的を逸脱し、又はGRLの品位を損なうおそれがあると認められるとき。
- (2) 法令に反するとき。
- (3) 公の秩序又は善良なる風俗に反するおそれがあると認められるとき。
- (4) 利用者が反社会的勢力であることが判明したとき。
- (5) 反社会的勢力の利益になると認められるとき。
- (6) GRLの他の利用者に不都合又は支障が生じるおそれがあると認められるとき。
- (7) GRL又は附帯する設備等を損傷するおそれがあると認められるとき。
- (8) GRLの管理・運営上、支障があると認められるとき。
- (9) 利用者が、GRL関係者に対して、次の各号に掲げるいずれかの行為に及んだとき。

ア 虚偽の事実を告げる行為

イ 粗野又は乱暴な言動を用い、並びに迷惑を覚えさせるような方法で訪問又は電話する行為

ウ 暴行又は脅迫その他の違法な行為

エ 金銭の支払い、責務の免除、契約の締結又は便宜の供与その他のGRLによる給付で、GRLが法律上の義務を負わないものを、GRLの意思に反して求める行為

- (10) 利用者が、法令違反又は不正な営業等によって社会的信用を失ったとき。
- (11) 政治活動又は特定の宗教の布教活動が目的と認められるとき。
- (12) その他GRLが不適當であると認めたとき。

(使用料)

第8条 レクチャールーム、小会議室等の使用料(以下「使用料」という。)の額は別に定める。
(別表1)

(使用料の納入)

第9条 第7条により使用の許可を得た者(以下「使用者」という。)は、所定の使用料を使用日の前日までに所定の納入先へ納入しなければならない。ただし、GRLが主催または共催する会合及び行事、学内者が主催するジェンダーに関わる教育、学術及び文化に関する会合及び行事については、使用料の納入を要しない。

- 2 既納の使用料は、返納しない。ただし、天災、事故その他使用者の責任によらない理由で使用できなくなったときは、その一部又は全部を返納するものとする。

(使用者の注意義務)

第10条 使用者は、この内規及び別に定める使用者心得を遵守するとともに、レクチャールーム及び小会議室等の施設、備品等を、善良な管理者の注意をもって、常に良好な状態で使用し

なければならない。

(目的外使用の禁止)

第 11 条 使用者は、使用が許可された目的以外にレクチャールーム及び小会議室等の施設、備品等を使用し、又は第三者に使用させてはならない。

(使用許可の取消し等)

第 12 条 管理責任者は、使用者がこの内規及び第 7 条に規定する使用の条件に違反したと認めるときは、当該使用者の使用許可を取消し、又は使用を中止させることができる。

(使用許可内容等の変更及び使用の中止)

第 13 条 使用者は、第 6 条の規定により使用の許可を受けた内容について変更する必要があるとき、又は使用を中止しようとするときは、直ちにその旨を管理責任者に申し出て、その許可を得なければならない。

(原状回復の義務)

第 14 条 使用者は、使用を終了したとき、又は第 12 条の規定により使用を中止させられたときは、直ちに使用した施設、備品等を原状に回復しなければならない。

(損害賠償)

第 15 条 使用者が故意又は重大な過失により当該使用に係るレクチャールーム及び小会議室等の施設、備品等を滅失、破損又は汚損したときは、その損害を賠償しなければならない。

(事務)

第 16 条 レクチャールーム及び小会議室等の使用に関する事務は、関係部・課の協力を得て、GRL において処理する。

(雑則)

第 17 条 この内規に定めるもののほか、レクチャールーム及び小会議室等の使用に関し必要な事項は、GRL 運営委員会、GRL 運営委員会小委員会の議を経て、管理者が定める。

附 則

この内規は、平成 30 年 5 月 1 日から施行する。

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL)
レクチャールーム及び小会議室等使用者心得

平成30年4月27日決定

1. 使用申請について

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（以下「GRL」という。）におけるレクチャールーム及び小会議室等の使用を希望する者は、別紙「ジェンダー・リサーチ・ライブラリ レクチャールーム使用許可申請書」を GRL 事務室に提出し、その許可を得てください。

許可無くレクチャールーム及び小会議室等を使用した者については、以後の使用を禁止します。

2. 使用時間について

レクチャールーム及び小会議室等の使用は、準備時間等も含め、GRL 開館時間（火曜日～木曜日と土曜日の午前 10 時から午後 5 時、金曜日の午前 10 時から午後 8 時）までとします。ただし、特別の理由がある場合で GRL 管理者が許可したときは、時間外の使用を認めます。

3. レクチャールーム及び小会議室等の使用について

- 1) GRL の建物内は、すべて禁煙となっています。
- 2) レクチャールーム及び小会議室内での飲食は原則禁止します。
- 3) 物品の販売は原則禁止します。
- 4) はり紙は、壁、扉、窓等に張らず、所定の掲示板を使用してください。
- 5) 大きな音を発する行事等を行う場合は、ライブラリの妨げになる可能性がありますので、申請の際に相談してください。
- 6) レクチャールーム及び小会議室等の使用後は、必ず使用前の状態に回復し、後片付け、戸締まり、鍵の返却等を確実に行ってください。

4. 備付け機器等の使用について

- 1) レクチャールーム及び小会議室等に備付けの機器を使用する場合は、その操作方法を熟知した上で、正確に使用してください。
- 2) レクチャールーム及び小会議室等の備品等（以下「備品等」という。）は、むやみに他へ移動させないでください。やむを得ず移動させた場合は、必ず元の場所に戻してください。
- 3) 備品等を滅失、破損又は汚損した場合は、直ちに GRL 事務室に連絡してください。

5. 使用料について

- 1) 学外の主催者によるレクチャールーム及び小会議室等の使用料（以下「使用料」という。）は、1 時間を単位として、固定資産貸付料金表（平成 29 年 4 月 1 日総長裁定）に定める短期貸付料に基づき計算します。
- 2) 使用料は、必ず使用日の前日までに名古屋大学事務局発行の納入依頼書により納入してください。
- 3) 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ レクチャールーム及び小会議室使用内規（平成 30 年 4 月 27 日制定。以下「使用内規」という。）第 3 条第 3 号又は第 4 号により使用する場合は使用料は、水道光熱費等の実費相当分とし、使用者が所属する部局の予算振替により納入するものとします。
- 4) 使用料金徴収区分及び使用料単価は、別表 1 及び別表 2 のとおりとします。

別表 1 (第 3 条及び第 8 条関係)

使用料金徴集区分

使用の範囲	使用料
(内規第 3 条本文) GRL又は男女共同参画センターが主催する会合及び行事	徴収なし
(内規第 3 条第 1 号) 本学又は本学の部局が主催するジェンダーに関わる研究、教育、学術及び文化に関する会合及び行事	徴収なし
(内規第 3 条第 2 号) 本学の職員等が主催するジェンダーに関わる研究、教育、学術及び文化に関する会合及び行事	徴収なし
(内規第 3 条第 3 号) ジェンダーに関わる学会その他の学術団体が主催して行う会合及び行事	別表第 2 における料金 (主催者：学外) による。
(内規第 3 条第 4 号) その他管理責任者が適当と認めたジェンダーに関わる会合及び行事	別表第 2 における料金 (主催者：学外) による。

※共催の場合は、パンフレット等に本学又は部局の名称・学章・ロゴ等の記載があり、本部又は部局が明らかに主体性を持つものに限る。

別表 2 (第 5 条関係)

1 主催者：学内

- 本学又は本学の部局が主催するジェンダーに関わる研究、教育、学術及び文化に関する会合及び行事
- 本学の職員等が主催するジェンダーに関わる研究、教育、学術及び文化に関する会合及び行事

使用場所	面積	使用料
レクチャールーム	82 m ²	無料
小会議室	15 m ²	無料

2. 主催者：学外

- ジェンダーに関わる学会その他の学術団体が主催して行う会合及び行事
- その他管理責任者が適当と認めたジェンダーに関わる研究、教育、学術及び文化に関する会合及び行事

使用場所	面積	使用料
レクチャールーム	82 m ²	2,826 円／時間
小会議室	15 m ²	537 円／時間

**2019 年度 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL)
ジェンダー研究集会開催助成金 募集要項**

1 目的

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL) は、国内外のジェンダー問題に関する研究の普及、推進が期待できる集会に対し、開催費の一部（但し飲食費を除く）を助成する。

2 対象となる研究集会

ジェンダー研究に関する集会。

3 助成費

1 件あたり 20 万円を上限とする。

4 助成数

年間 3 件以内。

5 申請条件

ジェンダー問題について研究する学内外の団体およびグループ。但し、申請者（開催責任者）は、学生・研究員・教職員等、名古屋大学構成員とする。

6 申請方法

以下のサイトから申請書類をダウンロードし、書式に従って記入の上、申請者（開催責任者。学生の場合は指導教員）が所属する名古屋大学各部局事務を通じて、GRL1 階事務室に申請書を提出すること。（E-mail 可）

* 申請書ダウンロード <http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>

〈受付期間〉 2019 年 5 月 20 日（月）～ 6 月 28 日（金）（必着）

〈問い合わせ、および申請書提出先〉

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

E-mail : grl@adm.nagoya-u.ac.jp

7 採否の決定・通知

採否は、GRL 運営小委員会の審査によって決定し、2019 年 7 月末日までに通知する。

8 報告書の提出

助成を受けた研究集会の開催後、1 カ月以内に所定の様式の報告書を GRL に提出すること。

9 その他

この助成金は、寄附金を財源としている。

印刷物等を作成する場合は、GRL からの助成を得たことを表示すること。

例：〇〇研究集会開催費の一部には名古屋大学 GRL ジェンダー研究集会助成金を充てています。

GRL 運営体制

◆ 管理責任者：高橋雅英（名古屋大学理事・副総長・男女共同参画担当）

◆ スタッフ：

教授：榊原千鶴（名古屋大学男女共同参画センター教授）

研究員：西山真司

司書：栗野容子

事務補佐員：福住恵み

◆ GRL 運営委員会（五十音順）

新井美佐子（名古屋大学人文学研究科准教授・2018 年度）

國枝秀世（名古屋大学参与）

榊原千鶴

高橋雅英

唯美津木（名古屋大学物質科学国際研究センター教授）

田村哲樹（名古屋大学法学研究科教授・2017 年度）

束村博子（名古屋大学男女共同参画センター長・副理事）

原盛将（名古屋大学総務部職員課長）

宮崎誠一（名古屋大学工学研究科准教授）

松下晴彦（名古屋大学教育発達科学研究科）

◆ GRL 運営小委員会（所属別・五十音順）

新井美佐子

隠岐さや香（名古屋大学経済学研究科教授）

國枝秀世

榊原千鶴

佐藤剛介（名古屋大学学生相談総合センター特任講師・～2018 年 9 月）

高橋雅英

田村哲樹

束村博子

服部美奈（名古屋大学教育発達科学研究科教授）

尾関博子（公益財団法人東海ジェンダー研究所）

西山恵美（公益財団法人東海ジェンダー研究所）

日置雅子（公益財団法人東海ジェンダー研究所）

安川悦子（公益財団法人東海ジェンダー研究所）

◆ 図書選定委員会（所属別・五十音順）

栗野容子

國枝秀世

榊原千鶴

服部美奈

西山真司

青木玲子（公益財団法人東海ジェンダー研究所）

尾関博子

西山恵美

◆ 広報委員会（所属別・五十音順）

隠岐さや香
國枝秀世
榊原千鶴
西山真司
西山恵美
日置雅子

◆ 年報編集委員会（所属別・五十音順）

新井美佐子
隠岐さや香
國枝秀世
榊原千鶴
小川真里子（公益財団法人東海ジェンダー研究所）
武田貴子（公益財団法人東海ジェンダー研究所）
西山恵美

編集後記

2017年11月、公益財団法人東海ジェンダー研究所のご厚意を得て創設された名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）が、東山キャンパスに開館しました。開館以降、全学委員会であるGRL運営委員会のもとに、実質的運営組織としてのGRL運営小委員会および各種委員会（広報委員会・図書選定委員会・年報編集委員会）が設置され、日々の運営はスタッフ4名（教員、研究員、司書、事務補佐員）と院生サポートスタッフ9名で行っています。

2017年6月から2019年3月まで初代研究員として業務にあたってくださった西山真司さんは、新年度より関西大学に准教授として着任することが決まり、4月からは、現在お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェローの張瑋容さんを、新たに研究員として迎えることとなります。

GRLでは、創設から1年を経て、年報としての『GRL Studies』を発刊することになりました。創刊号では、GRL創設に至る経緯とともに、初年度事業等の報告を記しています。発行にあたり、特集編集を担当くださった年報編集委員の方々はじめご協力くださった皆様にお礼申し上げます。（榊原）

GRL Studies

Vol.1

2019 年 3 月 31 日発行

編集：名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）
年報編集委員会

発行：名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

<http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>

印刷所：株式会社コムラ

